

第一章 クリスマスノート

一 クリスマスノート

平成二二年暮れの冬休み合宿と、年明けの正月合宿に六人の中学生が練習に参加した。この、受験前や入学前の中学生の練習参加のことについて少し話しておこう。

中学生の練習参加は、今回のような合宿に限らずしばしばある。過去には、中学二年生の時からずっと、平日の夕方にも練習に来た中学生が居たし、県外県内を問わず、夏休みや土日にコーチ又は保護者が引率して個人を連れてくる場合もある。

その思いは、鶴鳴でプレイをしたい（させたい）から見て欲しいという場合もあるし、高校バスケット界で通用するかどうが見極めて欲しいと思って参加する場合もある。結果もまた様々で、その選手たちがそのまま鶴鳴を受験し入学する場合もあるし、他校を受験する場合もある。

中学生の練習参加について私は次のような立場を取る。参加を希望する選手や保護者やコーチが、鶴鳴入学を希望し、自分をアピールするつもりで参加する場合も、自分は（この子は）これからさらに高校バスケット界で通用する選手になれるかどうかを見極めて欲しいと思って参加する場合も、

参加を断らない。

鶴鳴の練習に参加させるのではなく、見極めや査定のための山崎塾短期入門ととらえる。

保護者責任のもと必ず短期のスポーツ傷害保険に加入させる

決して勧誘めいた言動はしない。

数年前、F県のO中学校のN監督から電話があった。

「うちのガードのHという選手が鶴鳴の練習に参加したいと言ってるが受け入れてくれるかね」

「ああ、いいですよ」

H選手はその週の週末に保護者と共にやってきた。夏休み後半だった。H選手が練習に参加したのはそれきりでN監督から何も連絡がないまま月日が流れ、冬休みになった。そしてN監督から電話がかかってきた。

「ああ、O中学校のNだけど、Hが鶴鳴に行くことにしたらしい。よろしく頼みます」

「え！そりゃ有り難い話ですが、うちはもう特待生の募集は終わっていて枠はありませんが…」

「あらーそう…。そうだろうな。わかった、本人と保護者にその旨話す」

それ以後N監督からは電話もかかってこないし、H選手は受験にも来なかった。

通常は選手勧誘や進路の世話というのはこんなかたちではなく、まず高校の校長から中学の校長へ連絡が行き、それから高校の監督が中学校を訪問し、そのあと監督と本人と保護者の話し合いになるという手順を踏む。長崎では高校の監督の中学校訪問解禁日は十一月一日と定められていて、それに違反すると話がややこしくなる。O中学校は全国大会で優勝したところのある名門校なので、おそらく多くの高校がO中学校から選手が来てくれるとなれば有り難く受け入れていたのだろう。N監督もH選手も、そんな手順のことなどアタマにはなく、鶴鳴の練習に参加させてもらったということは鶴鳴はH選手を取る意志があり、取るならば特待生で取るのだとハナから思いこんでいたようだった。

選手勧誘のことについてあと二つほど話をしたい。

数年前、K県のS中学校の監督から「ガードのG選手がどうしても鶴鳴に行きたいと言っているんですけど取ってもらえませんか」という相談を持ちかけられた。S中学校のI監督は人格者で、彼もまた全国大会で優勝したことがあるし、転勤する度にその学校で全国大会の上位に食い込むチームを作る名監督である。I監督と私はそれまで何度も交流があつて、私はG選手のことをよく知っている。いいガードだ。しかしその時鶴鳴の一年生には全国中学大会で準優勝したチームのガードY選手がいたので私は断った。もしG選手を獲得したら前年獲得したY選手が飼育殺しになる可能性があるし、G選手がY選手を追い抜けなかつたらG

選手は三年生になるまでスタメンにはなれない。そんな優秀な選手を飼い殺しにするのはできないというのがその理由である。

結果的に、Y選手は二年生の時も三年生の時も鳴かず飛ばずでチームも県大会で二連敗した。一方G選手は地元のK高校に進学し、一年生の時からスタメンで活躍し、K高校のインターハイ準優勝に貢献した。どっちかが潰れた時のためにポジションがダブってモリザープを用意しておく方がチームにとって安心だが、選手個人にとってそれが幸せにつながるかと考えた時に、私は飼い殺しになるかもしれない勧誘はできないのである。勝負師にはなれないと言われるかもしれないがそれが私の流儀だから仕方がない。

もうひとつは、三月下旬に鶴鳴の二次試験を受けて入学したD選手の話である。

D選手は長崎県生まれでミニバスはずっと長崎県内の小学校で続け、中学校は一家転住してF県の名門P中学校に入学した。P中学校を卒業したあとはO県のM高校に行くことになっていた。それをドタキャンしてD選手は鶴鳴の二次試験を受けたのである。

私にP中学校のコーチから電話があったのは、鶴鳴の二次試験の三日前である。そのコーチも監督には内緒で私に電話をかけていた。経緯を聞けば、三年生の終わり頃D選手は監督から「お前はO県のM高校に行け。監督とは話しがついてるから」と言われたらしい。D選手はM高校には行きたくなかったがイヤとは言えないまま時間が経ち、いよいよM高校を受験しなければならなくなった時にたまたま「M高校の受験を取り消して鶴鳴に行きたい」とコーチに相談したのである。コーチも、その事情を聞かされた私もハイわかりましたと、右から左に事を進めるわけにはいかない。

私は、

受験するには二次試験を受けるという手段しかないこと。

二次試験を受けるには、P中学校とM高校の間で交わされた約束や条件の撤回を円満解決すること。

円満解決ができて、願書が鶴鳴の二次試験に間に合うこと。

以上三つの条件が揃わなければ受験は出来ない旨伝えた。

こんな時は保険をかけておかなければならない。相手には願書が期日に間に合わなかったら受験できないと言ったが、一日や二日の遅れなら受け付けてやれないかと、学校に打診しておかなければならないのである。私は鶴鳴の校長に事情を説明し、もし二次試験までに書類が間に合わなくても二次試験を受験させて貰えるか否かを尋ねた。校長はすぐ会議を開いて検討を重ねた上で「善処する」という回答を私にくれた。結局D選手は、一日遅れで二次試験を受けることができ、鶴鳴に入学することができたが、話がすんなりいったわけではない。あとで聞いた話によれば直前の三日間の出来事がすさまじかった。

P中学校とM高校の監督はお互いの立场上そんなことを許すわけがないし、P中学校もM高校も推薦による受験と受け入れを了承しているわけだから、P中学校がそれをドタキャンして別の高校を受験する生徒の受験書類を新たに書いてくれるわけがない。

そこでどうしたかというところ、D選手の親はP中学校から長崎県の実家に住民票を移し、その居住区にあるR中学校に転校願いを出し、R中学校から鶴鳴の二次試験を受ける手だてを考えたのである。親はその時点で次の手だても考えていた。それは、鶴鳴の二次試験に間に合わなければ、まずR中学校への転校は予定どおりにして、そのあと実家のあるS市の定時制高校を受験し、そこに入学してすぐ鶴鳴に転校するという案だった。

溺れる者藁をもつかむということわざがあるが、なんともすさまじい結末だった。R中学校と鶴鳴の校長が「規則や前例にとらわれて、ひとりの若者の将来を潰すわけにはいかない」という配慮をしてくれたからこそこのような結末になったが、こんなことが日常茶飯事の出来事となっただけではない。

私は常々、選手の進路に関しては本人と受け入れ側の合意が最優先であって、送り側の監督の都合や面子で選手の進路を決めてはならないと思っている。選手はモノではなくヒトなのだから。しかし、そうまでして鶴鳴が受け入れたD選手は二年生までプレイをしたが三年生になる時に部を辞めた。私の指導理念に合わ

なかったのかもしれない。ということは、D選手はP中学校の監督の指導理念とも合わなかったのかもしれない。であるとするならば、我々はD選手の身勝手に踊らされたことになる。無念…話をもとに戻そう。

冬休み合宿から参加したその中学生たちはとても熱心だった。練習の合間に選手がかわるがわるコートサイドの机の上置いた小さなノートに何やら書き込んでいる。なんだろうと思つてそのノートを手にとって見てみると表紙にクリスマスノートと書いてあった。

「ナニコレ？」

「先生に言われたことばの意味がわからないことが多いので、メモしておいて後で復習するんです」「フーン」

私はそのノートをパラパラッとめくりながら平成八年の風軍団のことを思い出していた。というより、その時のキャプテンの工藤雅子を思い出したのである。雅子には二歳上の姉が居た。姉はコーチと父親に強く勧められて鶴鳴を受験した選手である。茨城県のI中学校。とーんでもなく遠いところからやってきた。鶴鳴は毎年三月下旬に柏市でジャパンエナジー（現JX）が主催するヒマワリ杯に参加していたが、I中学校の監督も工藤の父親も毎回それを観に来ていて、ひそかに「私の娘（俺の教え子）もこんなチームでプレイさせたい」と思っていたらしい。

I中学校は姉の時は全国中学大会には出場できなかったが、雅子たちは関東大会で二位になり、大阪で開催された全国中学大会に出場した。その時までは雅子は中学を卒業したら地元高校に行くつもりだったようだ。ところが全国中学大会から帰ってきたら雅子は自分から父親に言い出した。

「おとうさん私も鶴鳴に行く」

「え？お前行かないと言つてたじゃない」

「うん、だけど全中のおと鶴鳴に行つてもう一度バスケットを勉強し直したいと思つようになつた」

その経緯については、大野慎子者物語の九六頁に詳しく書いてある。

その雅子が、入学して半年後の夏休みに帰省した時父親にこう話したそうである。

「私、ペアさんから絶対目を離さない」

「なぜ？」

「私、山崎先生から言われることばがわからない」

「でもペアさんは山崎先生の言うことを全てわかつてプレイしていると思つ」

「だから、ペアさんから目を離さなかつたら山崎先生が何を言おうとしたのがわかる気がする」

ペアというのは、佐世保市N中学校出身の櫻田綾香選手のことである。雅子より一年先輩だ。私は冬休み合宿に参加した中学生のクリスマスノートを見て、工藤雅子のこのことばを思い出したのである。

私は、バスケット用語の横文字を極力使わないようにして教える。だから、雅子もクリスマスノートを書いた中学生たちも、山崎先生のことばがわからないと言つているのは、ことばそのものの意味がわからないのではなく、私が指摘した場面がわからないのである。

「なぜそこでシュートを打つてはいけないの？」

「なぜその場所に居てはいけないの？」

「なぜパスは右サイドではなく左サイドにしなければならぬの？」

そんなことが、アタマの中で渦を巻いているのだ。

私は、「鶴鳴を長崎国体までにもつ一度全国の舞台で舞わせる」という理事長の特命を受けて、通常の定年を過ぎてなおチーム指導に携わらせてもらっている。なのに平成二十一年度と二十二年度は県内ですら勝てず、インターハイにもウインターカップにも出場していない。それを心苦しく思つていたところへこの六人がクリスマスノートを携えて鶴鳴に来てくれたのである。夏休み明けには六人も鶴鳴でバスケットをする意志を固めていて、冬休み合宿に入る前には学校を通して受験意志を表明していた。私はこのクリスマスノート

を見て風軍団の再来を確信した。

一 未っ子軍団

年明けに行う毎年恒例の正月合宿にもこの六人は参加した。私はこの六人を上級生の中に混ぜるのではなく中学生軍団だけのチームとしてしばしば起用した。対戦チームのJ先生が「先生、こいつらすでに鶴鳴じゃないですか!」と言った。J先生は、プレイのことだけではなく、目付きや態度のことも含めてそう言ったのだ。私もそう思っていた。ポジションも、ガード・フォワード・センターとバランスが取れているし、プレイ内容はこの時点ですでに風軍団が入学した年の夏休みを越えている。この時の二年生にはフォワードの福井が居たし、一年生には当時の長崎県内のビッグツ（フォワードの久松とセンターの川上）が居た。それにこの六人が加わるのだ。私はこの正月合宿中に平成二三年度から二五年度までの県内三連覇構想を何度も何度もシミュレーションした。

六人の保護者たちも熱心で毎日練習見学に来たが、その中の一人が「先生、今度の新入生はすごいすごいと言われますが、六人全員未っ子ですからねえ。それが吉と出るか凶と出るか、まだわかりませんよ」と冗談っぽく言った。私は、長女だから未っ子だからというのでその子の性格を決めてしまうのは当を得ているとは思っていない。が、このあとその保護者の冗談は的中することになる。

風軍団の選手たちの中で本当に「鶴鳴でもう一度勉強し直したい」という明確な自分の意志をもって鶴鳴に来たのは工藤雅子だけで、他は「先輩が居るから」とか「中学の監督から勧められたから」など、普通の動機で鶴鳴に来たのが大半だったが、この未っ子軍団は全員が「バスケットするなら鶴鳴で!」という強い思いを持って鶴鳴に来た選手たちだ。しかも、風軍団の選手たちと個々に照らし合わせて見ても未っ子軍団の方が上なのである。しかし、風軍団と未っ子軍団では入学してからの伸びが圧倒的に違った。

最初のトラブルは入学してから半年も経たないうちに一人の選手が退部し転学したことだった。他の選手と合わないのがその理由だった。私はこの時「あの保護者から示唆されたように、みんな未っ子なので互いに自己主張が強く、それでぶつかり合いが起きたのかなあ」と思った。ところが月日が経つうちにもっと根深いものがあることがあとでわかった。

ここで参考までに平成×年に保護者に通知した警告文書を紹介する。

平成×年×月×日

これは平成 年に選手の保護者宛てに出した文書です。今年の新入生も大差ないので再度出します。

保護者各位 チームの現状について

特に一年生の現状を報告します。巷では「鶴鳴は一年生が主力だから来年からはまたいいよ」と噂されています。そうではないことを、敢えてお伝えしておこうと思ってキーボードに向かいました。これは警告文です。選手が校則に触れるような、或いは警察に補導されるような虞犯行為をしたのではないのにこのような警告文を出すのは初めてのことです。

高校総体の案内文書に、「昔のように無茶はしないので選手が体力的に追い込まれることはないと思います。人としての在り方については厳しく追及するので精神的に追い込まれる選手は出るかもしれませんが。しかしそれを緩めるとお友達ごっこになってしまつので、それは部活動指導の生命線として私も譲りません。苦しいところです」と述べたのをご記憶でしょうか。

学校生活・家庭生活・社会生活・私生活の中で、「それはスポーツ選手としてふさわしくないだろう」とかとか「それはあまりにもいいかげんすぎるだろう」というようなことを身辺からことごとく排除しなければスポーツ選手にはなれないという意味で書いたものです。お子様たちはことごとくこれにひっかかります。忘れ物が多くて部活動や遠征や日常の練習に支障を来すことがあまりにも多すぎます。一人の選手に伝言を頼んだことがみんなに伝わっていないことがあまりにも多すぎます。伝言は確かに聞いたのに意味を解釈し

てない選手があまりにも多すぎます。提出物を出さずに平気で「忘れてました」と言うことがあまりにも多すぎます。極めつけは、トレーナーに来て貰って本日傷害予防チェックをやりましたが、個人個人のカルテに記入しておかなければならなかったことを記入していなかった選手がほとんどです。こんなことは山崎塾塾生では前代未聞の出来事です。

そのほかにも「バカかおまえは」と言わなければならないような出来事が頻繁に起きたり、いじめまがいのことが起きたりもしています。これはコートの上だけでは絶対に解決できる問題ではありません。自分の生活全てを見直して改める必要があります。それができなければ来年になっても再来年になっても今年と同じようなでばえの試合しかできません。そのことをご承知おきください。なお、この警告文は保護者の方々にしつけ教育を徹底してくれという意味で書いた文書ではありません。現状をお知らせする文書です。そして、これは徹底して改良していきますよという私の意志を伝える文書です。

念のために言うておくが、この警告文書は未っ子軍団の保護者に通知した文書ではない。平成×年度の選手全員の保護者に通知した文書であるが、平成×年度だけの新入生が特別にダメだったというわけではなく、平成×年度からずっと繰り返されて引きずってきた問題である。事の大小の差はあれ、未っ子軍団の最初のトラブルである一人の選手の退部転学事件の根底にもこの種の問題があり、それが根っこに引っかかっていたのである。

しかしそんなことは風軍団にもあった。ある選手の眉剃りが発覚して私からこっぴどく叱られたり、ある選手の寮での規則違反に腹を立てた私が、その選手を殺さんばかりの勢いで殴りつけたのでキャプテンの工藤から制止されたことがある。しかもそれはインターハイ出発の一週間前だった。ではなぜ風軍団は世間を騒がせるチームになり、未っ子軍団は風軍団に成り得なかったのか。過去を振り返りながらこれから検証してみたいと思う。まず、未っ子軍団が一年生の時のクレインズの主力選手の解剖から始めてみる。

福井（三年生大島）

彼女は未っ子軍団が正式に入学する前の県大会で前十字靱帯を切った。彼女は中学二年生の時にジュニアオールスターに選ばれたが、全国大会出発直前に左足の前十字靱帯を切り、ジュニアオールスターには出場できなかったばかりでなく、中学三年生の時はまるまる一年間公式試合に出場していない。しかも、高校に入って三年生に進級する直前、今度は逆の足の前十字靱帯を切ってしまったのである。

私は彼女が入部してきた時にすでに彼女のケガ、しかも大ケガをしそうだといいことを予感していた。彼女は短距離も長距離も速く、ジャンプ力も優れていた。ところが彼女は身体が異状に固く、加えて本能的衝動的に動く習性があった。危険な状況や不利な場面を顧みずオフェンスもディフェンスも果敢に相手に挑むのである。私は彼女が入部してきた時にストレッチングボードをふたつ購入し、ひとつは学校で使用する個人用とし、もうひとつは自宅用として普通のストレッチングに加えてふくらはぎとアキレス腱のストレッチングを二倍多くやるように指示した。しかしその甲斐なく、私は三連覇構想の中から選手を一人外さなければならなくなった。

久松（二年生喜々津）

久松は、中学生の時は走るし跳ぶしジャンプショットは綺麗だし、これは二〇年に一度現れるかどうかの選手だと思った。そう思っていたのは私だけでなく、県下のバスケット関係者の誰もがそう思っていた。しかし、これは入学してから発覚したことだが彼女は大きな弱点を持っていた。それは体幹の筋力と腕力が著しく弱いことだった。中学時代のジャンプ力とダッシュ力からは彼女の体幹筋力の弱さと腕力の弱さはまったく想像できなかった。ところが高校に入って半年もしないうちにそれは露呈し、激しいマークに遭えば勢を崩し、ボールをファンブルする場面が頻発するようになった。中学と高校では当たりが違っているので、それまで目立たなかった弱点が浮き彫りにされることが多々ある。久松はその一例だった。

さらにこれも、彼女の中学時代の華麗なプレイからは想像もできなかったが、実は彼女の目はプレイの展

開が見える目ではなかった。特にディフェンスにおいてはそれが際立ち、潰れたりやられたりする場面が頻繁に起こった。

川上（二年生翁頭）

体格の大きな選手は動きが遅い。それは折り込み済みなので気にならないが、川上はグラウンドランでは最後まで五千丸を二七以内で走れるようにはならなかった。これでは四〇分間フルに走ることはできない。

最後は末っ子軍団の一人ひとりを解剖しながら風軍団の選手と比較してみる。

釣屋（一年生光海）

彼女は末っ子軍団の中では短距離も長距離も速く、駅伝大会にも出場した。プレイもオフエンスディフェンス両面で風軍団の工藤の入学時を上回っている。そして極端な負けず嫌いだ。その負けず嫌いが時々災いの基となった。「そこまで力まなくてもいいだろう」というプレイをして自滅するのである。でもそれは、難しい局面になれば他人に丸投げする他の選手に比べれば、弱点というよりむしろ救いの神になることが多かった。

山下（一年生光海）

風軍団では下級生でただひとりのスタメンでスリーポイントシューターだった副田が山下と比べるにはちよつどよいポジションだ。この二人を比べると、確かに副田の方がシュート力はあったが、ドリブルやディフェンスなど総合的に比較するとこれも山下が上回っている。しかしその山下も自分の中の思いが強く、釣屋同様自滅プレイが多くて常に諸刃の剣的存在だった。

山中（一年生滑石）

中学生の時に見た山中は間違いなく大野を追い越す選手だと思っていた。足は速いしジャンプ力はあるしドライブはスピードがあるしドライブからのアシストパスがすばらしかった。高校に入って一年目は手首を左右とも一回ずつ傷めてブランクがあったのでデビューが遅れたので最初は気付かなかったが、彼女を主戦力に仕立てようとして彼女の改造に着手したら彼女の弱点が浮き彫りにされてきた。

まずドリブル。彼女は左手でのドライブが鋭かった。普通右利きの選手は放っておくと利き腕の右手ではドライブしようとするが不得手の左手ドリブルには積極的にならない。だから私は、右利きなのに左手のドライブが鋭いのをとても気に入った。しかし山中は、右利きのくせに左手ドリブルにしか積極的にならないクセがあっただけだった。ひょつとしたら、幼い頃は左利きだったのを親または祖父母から右利きに治されたのではないかと思って聞いてみたがそんなことはないという。

次にアシストパス。すばらしいと思っていたアシストパスは実はドライブからのレイアップシュートの不確かさの裏返しプレイだった。彼女はレイアップシュートのリリースで力を抜いてフワツと置いてくるシュートができないのでほとんどバックボールドに強く当たって跳ね返ってくるかリングを飛び越してしまうシュートになるのである。だから本能的に不得手なレイアップシュートを回避してアシストパスに活路を求めたのだ。

さらに、強い脚力を持ちながらディフェンスがひどかった。ドライブでよく抜かれるのである。当初私はこれをデビューが遅れたからだと思っていたが、彼女が二年生になってからそうではないことに気付いた。彼女は足さばきに問題があった。ダッシュのあとのストップや切り返しの際に、足幅を広げすぎるクセがあるのだ。そのために膝が内折れ状態になり上半体が前かがみになる。だから一瞬の動きに遅れるのである。

致命的だったのは久松とまったく同じで体幹と上腕の筋力が著しく弱かったことだ。入学当初の筋トレでも「この子腹筋が弱いなあ」と思ったことはあったが、戦力として本格的に彼女を診始めるとそれが致命的に弱いということがわかった。

木原（一年生西浦上）

彼女は中学三年生の時は平日であつても可能な日は鶴鳴の練習に参加するほど鶴鳴熱望の選手だった。風軍団の中で彼女と比較するポジションに居たのは大滝だろう。大滝と木原の入学当時を比較すると木原の方

が圧倒的に上だ。なんと言つても木原は身体が頑丈だった。大滝はヒョロヒョロしていて、風がある日は窓を閉めなければ窓際を通る時は風に押し流されそうだった。しかし木原には入学後間もなく重大な弱点があることがわかった。それは、型にはまったら強いがちょっとタイミングがずれたり、思わぬ抵抗に遭った時の応用が利かないという弱点だった。

川口（一年生岩屋）

川口も木原と同じで彼女は中学二年生の時から週末といわず平日といわず、参加可能な日にはしょっちゅう鶴鳴に来ていた。所属チームが弱小チームだったことと、ミニバスはかじっているがこれまた弱小チームだったので、入学した時は素人同然で戦力にはならなかった。風軍団の選手と比較するなら肘井がピツタリだ。川口も入学当初は素人同然だったが肘井もまたひどかった。肘井の走る姿は身体のどこかに異常があるのではないかと思うほどアンバランスだった。

川口は、入学当初素人同然だったことを思えば長足の進歩で、未っ子軍団の中ではもっとも速く山崎バスケットを吸収した選手であると言つても過言ではない。しかし、川口にも深刻な問題点があった。それは、長足の進歩で身につけた技術を、勝負所で使おうとしないのだ。いつも主役にはなろうとせず、脇役に甘んじていた。うまく言ったとは言つてもそれまで主役になったことがないから一年生の時は仕方がないとしても、二年生になつてもそこから前に進まないのがもどかしかった。

総評

平成三年のインターハイ優勝の時のセンターは小磯（旧姓浜口）典子である。彼女はオリンピックに二回出場しているので私は彼女のことではしばしばインタビューを受けた。記者は問う、「高校時代の彼女ってどんな選手でした？」私の答えは「泣き虫マツク。練習嫌いで泣いてばかりいました」だった。しかし彼女は三年生の時は島原半島の小浜町で行われる県下高校駅伝大会に鶴鳴の選手として出場している。小さくてガリガリの選手に混ざって走った一八三センチの浜口は話題になり、優勝したチームではなく彼女が駅伝の話題で新聞に載った。

風軍団も同じく駅伝大会に出場し、上位入賞している。彼女たちは小兵で、全国大会に行くと桜花学園や中村学園にはじき飛ばされるので、グラウンドでの心肺機能を高めるトレーニングや体育館でのトレーニング（筋力トレーニングとスピードトレーニング）はみっちりやった。浜口にしろ風軍団にしろ、その成果は当時年二回実施していた医科学測定のデータにもはっきり現れている。

さらに未っ子軍団が入部してからは、それに加えて陸上部の先生から習った筋トレも導入している。それでも川上は浜口にはならなかったし、久松の体幹筋力や腕力も強くはならなかった。さらに、久松は三年生の高総体で前十字靭帯を切り、三年間無冠のまま高校でのバスケット生活が終わった。福井・久松はほとんどの試合でチームの最高得点をたたき出したが試合を決定づけるシュートはよく落としたり。

未っ子軍団も同じで、山中は三年生になるまで体幹筋力も腕力も強くはならなかったし、他の選手のトレーニング効果も、学年が進行しても数値が上がらなかった。個々の選手の弱点となつているプレイの癖や心のあり方や場面の見方についても関わり続け、さまざまな手段で修正を試み続けてきた。

弱点矯正は時間がかかる。簡単に治せるものではない。だから、弱点を抱えたまま試合をしなければならぬのだが、すべての選手に個々の弱点を理解させ、その弱点が露呈しないような係わり方をしながら試合を展開していく方法も教えた。これはとても根気と忍耐の要る仕事だった。根気強く係わり続けたが、ナイスプレイは誰もがやるが試合を決定づけるプレイをやる選手が出てくるのを見届けなまま私はリタイヤすることになった。

年を経る毎に私は昔の教え子から「先生優しくなったね」と言われることが多くなったが、自分の中ではまったくそうは思っていない。暴力やしごきはなくなったが選手を精神的に追い込むことやバスケットを追求する姿勢はまったく変えていないつもりだ。事実、平成二三年の夏以降リタイヤするまでの半年間は、四年前に桜馬場中学校を指導していた頃に勝るとも劣らない厳しさで取り組んだ。釣屋以下、全員とは言わ

ないまでもせめてふたりぐらいは「弱点を克服しました」と言える選手が出てきたら間違いなく風軍団を追い越すチームになると思ったからである。それは叶わなかった。ひよっとしたら「優しくなった」を否定する私の中に「甘くなった」が潜んでいたのかもしれない。

ここで、皆様には試合毎にお知らせしていた各種大会の案内報告の、末っ子軍団が入学してから私がリタイアするまでの分を再掲して振り返ってみることにする。

三 末っ子軍団の足跡

平成二二年度のチーム構成

三年生 後藤（淵中M没）吉岡（喜々津）福井（大浦）泉田（式見）上瀧（有喜）

二年生 岸上姉妹（小島）黒田（有喜）長田（小ヶ倉）小林（西浦上）酒井（桜が原）福井（大島）

一年生 中村（西大村）久松（喜々津）林田（小島）川上（翁頭）船津（片淵）岩永（長与二）

平成二三年四月 県下高校春季選手権大会 四位 スタメン 久松 林田 酒井 赤島 川上

【案内文書】

毎年のことですが、この大会では新入生をデビューさせてやります。したがって三年生の中には新入生よりの力があってもこの大会ではエントリーから外れる選手が出てきます。逆に六月の高校総体では、新入生と三年生の力に大した差がなければ三年生を優先します。高校総体というのは三年生にとっては晴れの舞台だからです。ここで勘違いされては困るのは、この大会で起用された新入生から「自分は将来性を囑望されているのだ」と思われることと、高校総体で起用された三年生から「私は戦力だ」と思われることです。この大会で起用する新入生は将来性を囑望しているから起用しているのではなく見極めをしたから起用するのです。高校総体で起用する三年生の中には思い出作りのためにエントリーしてやっける選手もいるのです。現在、マネージャーを除いた選手は二十七人です。その中で、試合や遠征時にエントリーから戦力として外せない選手は八人います。その八人もまたいろいろで、この選手は絶対外せないという選手もいれば、精神面が脆いけどプレイはまずくないからエントリーするという選手もいます。では、この八人以外はチームに貢献していないのかということではありません。貢献度は、戦力として試合に出せるか否かが基準ではなく、存在そのものが基準です。

相田みつをさんのことばに「あなたがそこにただいるだけでその場の空気があかるくなる」というのがあります。そういう選手もいます。逆に毎試合三〇得点する選手であってもストレスの元凶になることがあります。でもみんなみんな併せてチームなのです。ストレスの元凶になっている選手を排除してもチームとしては機能しないし、その場の空気があかるくなる選手ばかりでもチームは成り立ちません。

さて、新入生が参加してからずっと、木原・川口・中尾の場面理解力を高めるためだけに三対三の練習ばかりやってきました。それを高めなければチームとして前に進まないからです。その間ずっと、久松・川上・林田・酒井・岸上・赤島・釣屋・山下・山中はそのお手伝い。他の選手は自習です。お手伝いばかりさせられた選手が「なんで我々はお手伝いばかり？」自習組が「我々は居ても居なくてもいいの？」と思っていたか、「これはチームが前進するには不可欠なんだ」と思っていたか、その思いの一端が今度の試合で見えると思います。

【結果報告】

初日

この大会直前に膝を傷めた木原のことについて報告します。今日の午後二時にMRI画像による医師の診断を受けました。靭帯損傷なし、半月板損傷なし、骨折なし、骨挫傷なしです。デビュー戦に合いませ

んでしたがこれから巻き返します。

二日目

純心戦の第二ピリオド終了直前、山中がナイスディフェンスでチャージングを取りました。ところが転倒した際の手の着き方が悪く、右手首を負傷。ハーftimeに彼女の手を診ましたが、腫れが普通じゃないので中手骨か手根骨か橈骨の一部が骨折しているかもしれないと思い、大病院の救急外来を受診させました。試合終了後、私は大村で行われているFIBASIA会議に出席してましたがそこに電話が入りました。骨折なし、関節のズレなし。

初日も二日目もケガの報告ばかりですが、私はこのことを不運ととらえるよりむしろ幸運ととらえています。なぜなら、「一人とも長期治療を要するケガではなかったからです。これまで、黒田にしる福井にしる「いい選手を獲得できたぞ」と思っていたらケガ。しかも二人とも一年間はプレイできない重傷。しかも黒田は二回も同じ部位を。これは不運というしかない出来事。今年の新入生は全員無駄なしで、黒田や福井の時と同じように「いい選手を獲得できたぞ」です。その中から二人がケガしたわけですが、軽傷で済んだということは、神様が「ちょっとだけ心配させたけど、これ以上お前には意地悪はしないぞ」と言ってくれたんだと思うのです。

最終日

ぎりぎりの戦いになるとそれぞれの人間性が浮き彫りになります。特にいやな一面がむき出しになってきます。それでも「いいチームメートに出会えた」と思ってこれからやっていけるか？ 少女趣味の青春ここから抜け出せるか？ これから試されます。

平成二三年六月 県下高校総体 三位 スタメン 久松 川口 中尾 釣屋 山中

【案内文書】

試合には使えないほどの改善箇所を持ったままの選手を使いながら試合をするのは難しい。勝負のため の采配でなければならぬし、試合しながら覚えて欲しいという起用もしなければならぬ

これは倉敷遠征が終わった直後の五月六日の私のコメントです。

一日置いて次の土日は佐賀で行われたバルーンカップに参加しました。そのコメントがこれです。

長い強化試合シリーズが一段落した。強くなったと思う。が、今日の結果については腸（はらわた）が煮えくりかえる思いだ。しかし、それはそれ。これから高校総体まではいかにして強くするかよりも、いかに休養を効果的に与えるかがカギとなる。だが、休養が緊張感まで消失させてしまうと元も子もなくなる。監督の手腕が問われる一ヶ月だ

それから約三週間が過ぎました。選手の目つきが変わりました。というより、私の目つきが変わったので、それが選手に反映したのだと思います。が、私の目つきはホンモノでも選手の目つきはホンモノではありません。選手の行動のちょっとした場面に幼稚さが垣間見えるのです。それはもちろん承知の上。一年生から入学後一ヶ月で幼稚さが消えて無くなるようなら監督は要らないのです。その幼稚さを搭載したまま戦場に向かわなければならぬし、しっかり戦わせなければなりません。

今もつとも気にかけているのが木原の右足脛骨疲労骨折と川口のふくらはぎ痛です。総体に向けて鍛え込みたいけれど鍛えすぎて壊してしまつては意味がありません。使い過ぎないように気をつけながら練習に参加させ、時々診察してありますが今のところ痛みは軽減傾向にあります。このまま行ければ総体が終わった時に足が折れていてもいいから目一杯使おうと思います。

さて、エントリーについて述べます。春季選手権では名簿から外していた福井をアシスタントコーチ役で載せました。ACLの手術から三ヶ月しか経っていないのでプレイはできませんが、三年生にとつて最後の高校総体なので推戴式のステージに立たせることにしたのです。そういう意味では他の三年生も載せてやりたいのですが、情に流されてエントリーを決め、それで試合に負けたら個人が幸せであつてもチームは不幸

になります。毎年のジレンマです。

【結果報告】

初日

バルーンカップ初日（五月七日）と比べると六〇%ぐらいの出来でした。目を背けるようなミスはありませんでしたが、強くなったとはいえ「こういう一面があるんだよなあ」のオンパレード。でも、あと三日間のタフゲームが続くことを思えば悪い一面は今日出してしまった方がいいか……。

二日目

インターハイやインターカップなどの全国大会はベスト八に入るまではビクビクどきどき。県高校総体は決勝リーグに入るまでがビクビクどきどき。これは二〇年前も今も変わりません。レベル的には全国大会のベスト八が県高校総体の決勝リーグよりはるかに高いのですがプレッシャーは逆です。というわけで今はホッとしています。今日の試合、選手たちの危なっかしさは相変わらずでしたがそれはすべて想定内。出来不出来は個人によって違いはあるものの、出来の良さも出来の悪さも私の想定範囲を著しく逸脱してはいません。あとは明日と明後日の二日間、この材料を使って私が最高の料理を作るだけです。山崎シェフの手腕が問われる二日間です。

三日目

バルーンカップの小林戦や佐賀清和戦が再現できれば県高校総体では優勝が狙えるし、佐賀北戦のような試合になれば決勝リーグ入りすら危ない。その後者が今日出ました。それも私の想定には入っていたので、なんとか軌道を修正しようとして川上と川口を二枚同時に使った布陣で攻撃を組み立てたり、この二人を外してオールコートマンツーマンディフェンスを展開したり、選手の組合せを替えたりといろんな手を使いました。しかし、どれも不発に終わりました。明日からまたこの不発弾処理に腐心する日々が続きます。

最終日

不発弾処理の最終課題はコート外での生活を見直させることです。次が、バスケットを趣味の域ではなく仕事としてやっていけるように選手たちの意識を変えることです。私は趣味と仕事の違いをこうとらえています。趣味は気が合った仲間と気が向いた時にやればいい。仕事は気が合わない者とも気が乗らない時にもやらなければならないし、結果を出さなければならない。この二つを一〇月までになんとか……。

平成二三年一〇月 ウインターカップ予選 三位 スタメン 久松 川口 釣屋 山下 川上

【案内文書】

六月七日の県高校総体で負けて以来一二九日ぶりの公式戦です。途中、一〇月二日開催の県総合選手権に参加することはできましたが、この日が文化祭と重なるので昨年から参加していません。四ヶ月も公式戦なしで練習のみというのは、選手を飽きさせないようにするのに苦心します。みなさんから「アジア大会大変だったでしょう」と言われますが、そのことの中には「チームを見る時間がなくて大変だったでしょう」とか「アジア大会の補助役員で選手も充分練習できなかったでしょう」が含まれています。確かに私がチームの練習を見る時間は制限され、選手の練習回数も減りましたが、それがチーム強化に影響したかということまったく関係ありません。それはそれでまた、私にとっても選手にとっても得る物がありましたから。

さて四ヶ月の間、選手の中でもいろんなことがありました。日常生活の甘さにより私から一週間の練習停止を命じられた選手が出たり、選手間の競争の中で抜いたり抜かれたり、選手同士のいざこざで群れからはじき出される選手が出たり、辞めたり、辞めそうになったり……

そんな中で、アジア大会のためにしばらくやれなかった練習再開の二日目。我が目を疑いました。そのままでディフェンスがまったくできず、戦力としては計算できなかつた木原が酒井にドライブで抜かれそうだったのを止めたのです。目をこすってそれから彼女をしばらく観察していました。が今度はちゃんとディナイし酒井へのパスを封じました。どうやらまぐれでも偽物でもないようです。まだまだスタメンを張れる域に

は達しませんが木原が戦力として計算できるのでできないのではまるっきり違います。でも彼女は大事な場面でよくケガをします。理由はアンテナの本数が少なく、自分の周辺の危険因子を察知できないからです。最近では九月中旬の山口遠征の初日に足首を捻挫してしまいました。ケガも実力のうち。木原からそれが消えてなくなればクレインズは本場に強いチームになると思います。

ケガといえば、一〇月八日からの三連休に招待合宿をしました但那がその初日、スタメンガードの山中が手首を骨折。そこで残りの二日間は布陣を変えて戦いましたが、山中を外した布陣に他の選手も慣れ、実りある合宿を終えることができました。あとは私の采配次第です。

【結果報告】

初日

私が所用で試合会場に顔を出せなかったのでアシスタントコーチの三根氏に引率とベンチを依頼しました。スタメン、ディフェンスの種類、交替は指示を出しましたがどんな試合展開だったのかはわかりません。明日はちゃんとベンチできます。

二日目

一試合目。試合の流れが安定したのを見て福井を起用してみました。福井を出すことについては当初から考えていたことではありますが、「大丈夫かな?」「まだいけそうだな」と様子を見ながら、「もうだめだな」が来ないまま後半ずつと出してしまいました。前十字靭帯損傷の選手は数え切れないくらい見えています。こんなに回復が早い選手は平成十九年卒の高崎選手(術後六ヶ月で復帰)以来二人目です。

二試合目。小さな事件はいろいろありましたが、それがあとに尾を引くこともなく、チームに蔓延することもなく、試合を締めくくることができました。ここ五年ほど、技術や体力では何ら問題がないのに人間としての奥深い部分で信用してやれない状態が続いていましたが、今回それはまったくありませんでした。もっとも、この試合で急にそうなったのではなく、アジア大会が終わったあとの練習では「少しは成長したのかなあ」と思わせる日々があった上での今日の結果ですが。

最終日

長崎西戦の直接の敗因は第四ピリオド開始二分過ぎから連続五本スリーポイントを決められたことです。きっかけは、久松のパスカットがあと五ミリで空振りに終わった直後の西村選手のスリーポイントシュートです。バックボールに当たって入りました。それから連続四本決められました。しかし、それはまぐれでもたまたまでもなく、それをもたらした原因があります。鶴鳴はずつとリード。鶴鳴の選手には「軽率プレイはだめ」という心理が働き用心深くなった。一方、ずつと主導権を握られていたけど追いついてきた長崎西の選手には「いけるぞ」という心理が働き思い切りがよくなった。私はそう分析しました。怒りも無念さも失望感もありません。

平成二十三年十一月 長崎地区新人戦 三位 スタメン 久松 川上 山下 釣屋 山中

【案内文書】

十一月五日(土)と六日(日)の二日間、自衛隊大村部隊に選手たち全員を体験入隊させました。私のHP山崎純男の本の中の監督一代の中のしつけに書いてあることが、最近の選手に当てはまらなくなってきたからです。要約しますと、上級生の下級生に対する目配りや思いやりが甘くなり、新生の幼稚さが夏休みを過ぎても抜けなくなった、ということですが。

このことは何もうちのチームに限ったことではないと思います。若者たちを見ているとそんなことが最近強く感じられます。スポーツの試合は勝ち負けではなく、勝つまでにどんな鍛錬をしてきたか、選手たちの人間の中身がどう変わったかを観客は見に来ます。我々はその期待に応えなければなりません。しかし、それが自衛隊に体験入隊したからといってすぐさま変わるものではなく、根気強くしつけをしていかなければならないものだと充分承知しています。が、コーチや選手がなんとかしてその実現に向けて努力をしなけ

ればならないのは今も昔も変わらないと思います。

さて、練習内容のことについて述べます。先月下旬の選抜予選に負けて以来、練習は個々の力を高めるための部分練習しかしていません。個々の力の中でも、少々抵抗されても点を取る力を高めることが最優先事項です。やる内容は特別なことではありません。普通の対一や二対二です。

「対一の攻防を二〇回練習したとしましょう。」「はい、二〇回終わりました」「は幼稚さが抜けない練習。その二〇回の攻防すべてに思いが込められていれば練習成立。思いとは、「なんとしても決めたい」「なんとしても取りたい」「やった!」「クソッ!」などです。

皆様ご存知のとおり、三年後には長崎国体が開催されます。今の高校現役選手はその時卒業していて、今の中学三年生が主役になります。しかし、今の中学三年生を強化するだけでは国体は成功しません。それまでに今の高校現役の選手たちがしつかりレベルを敷いてやらなければなりません。この新人戦には、全てのコーチと全ての選手たちがそのような強い思いを持って臨んで欲しいと思います。

【結果報告】

初日

●選抜予選で負けた翌日の一〇月二四日(月)から十一月十四日(火)まで十八回の練習すべてを個々の力を高めるための部分練習に使ったということは前に述べました。それに区切りをつけ、この大会に入る前の三日間はスクリメージ中心の練習に切り替えましたが三日間ともすべてひどい出来でした。中には、選抜予選前よりもパフォーマンススタウンしている選手さえ出る始末。そんな状況で迎えた新チームの公式戦初日でした。

私は、個々の選手の表情や目つきに特に気を配り、心理的に良好な状態で明日を迎えさせられるよう今日の二試合のベンチを務めました。それが功を奏したかどうかはわかりません。わからない理由は、選手の真の姿が浮き彫りにされるような敵しい局面が今日の二試合では出なかったからです。

主力選手にとってはそんな初日でしたが、いつも主力選手の手伝い役ばかりで日の当たる場所に出ることがなかった選手たちにとっては幸せな一日だったと思います。なぜなら、今日の彼女たちは主力選手と同じくらいの時間帯試合に出場することができたからです。

最終日

この四日間のチーム観察による私の感想から、出来がよくない試合になるのではないかという予測はしていました。身体が動いていない、プレイの切れが悪い、決断が鈍いなどが目を重ねても改善されなかったからなのですが、それよりも、自分の出来がよくないのに、出来がよくない自分に怒りを覚えている選手が見当たらなかったのが大きな原因でした。あれこれ試みて自分を本来の姿に戻そうとする知恵が湧いてこない。そこで私が知恵のヒントになる助言をする。しかしそれもいつの間にか立ち消えになる。その繰り返しそのまま大会に突入したのです。

おそらく、人間の奥底に棲み着いているイヤなヤツ(うちの選手だけではなく全ての人間の中に棲んでいる)を身体から追い出してしまわなければこのようなことはこのあとの人生の中で何度も起こるでしょうから、選手が山崎塾で学ぼうとする限り、私と選手のこの戦いは延々と続くことになると思います。

平成二四年一月 県新人戦 三位 スタメン 久松 木原 山下 釣屋 山中

【案内文書】

十二月二日から二六日までと一月二日から七日まで延べ十一日間の招待合宿(というより押しかけられ合宿)をやりました。年末は旭川北、正月は札幌創成と、遠い北海道から二チームも駆けつけてくれました。なかなか勝てない鶴鳴なのにこうして集まってもらうチームに感謝です。その合宿の成果がどんなものだったか、一月七日の私のブログに書いたことを再掲します。

暮れからずっと続いた合宿。正月休みを挟んだとはいえ、相手は入れ替わり立ち代わり合宿に参加しま

すが、ホストチームの鶴鳴は初日から最終日までずっと相手をするわけですから疲れないはずがありません。ですから勝てる試合を落としたり、勝つべき相手に負けたりすることが起きます。でもTKOにはならず、最後までリングに立ち続けた彼女たちは立派だったと思います。そして、釣屋・山中・山下を軸に攻撃を組み立てる方策が見えたことと、久松は負担を軽くして泳がせた方がよいとわかったことと、木原をなんとかしてもスタメンに定着させられる選手に育てることが必須条件だとわかったことは大きな収穫でした。これから六月まで、木原には地獄を味わってもらわなければなりません。木原にだけ地獄を味わわせるのではなく、当然私も木原と一緒に地獄を味わいます

さて、練習内容のことについて述べます。合宿明けの一日からずっと、個々の力を高めるための部分練習に終始しました。十一月にも同じことをしましたが、それと内容が少し違うのは、釣屋・山中・山下トリオのコンビネーションと久松・木原・川口・川上のシュート&リバウンドの二つに分けたことです。十一月と大きく違うのは、久松がガード組からフォワードセンター組にコンバートされたことです。

冬休み明けは走る練習やスクリメージは皆無ですが、走る練習なしで体力は保つか?とか、スクリメージなしでの試合大丈夫か?など、気にならないわけではありませんが、目の前に絶対解決しなければならぬ課題があるのにそれを曖昧なままにして先に進むことはできません。

【結果報告】

初日

大差の試合になっても、サービス出場のための選手交替はしません。それは、大差で勝ちたいからではなく、学習させなければならぬ選手に学ぶ機会を多く与えなければならぬからです。学習させなければならぬ選手とは主力として働かなければならぬ選手のことです。では初日出場の六人のみが主力かというところではありません。この六人に林田と川上が加わります。この八人が、主力であるという自覚を持ち、学ぼうとする強い気持ちを持たなければならぬのですが、まったく学ぶ気持ちを持たない選手もいます。そんな選手にも学ばせ、学ぶ気持ちを持たせるのがコーチの最も重要な仕事です。大変苦しい作業ですが…

二日目

基礎的な学問を学ぶ。

学んだ学問を基に現場で試してみる。

から得たものを自分のキャリアとして積み重ねていく。

というサイクルがなかなか身につかない選手は進歩しません。自分の慣れ親しんだプレイだけで多様なケースに対処しようとする選手はちょっと変わった相手に戸惑います。そんな選手たちを、普通の社会生活ができるように仕立て上げる作業がふんだんに盛り込まれた二試合でした。

最終日

年末からずっと続いた合宿で、最後までTKOにはならず、最後までリングに立ち続けた彼女たちは立派だったと思います」と、この大会の案内文書に書きました。このようなこともありますが、今日のような試合をすることもあるのが今年のチームです。原因は分かっていますがそれをすべて明かすことはできません。抽象的な表現しかできませんが、選手たちが私の口から出ることをたましいで受け止めるようになればすべて解決すると思っています。とても根気のいる作業ではありますがやります。

平成二四年二月 九州春季戦 Bパート四位 スタメン 久松 釣屋 山下 山中 川口

【案内文書】

今年から、各県二チーム出場ではなく、各県四チーム出場となりました。九州各県から三二チームの出場となりますが、三二チームのトーナメントで決勝までやれば四日間かかりますからそれでは運営が大変です。それで、関東大会等数地区で実施されている方式で、各県の一位二位パートと三位四位パート別々のトーナメントで試合を行うのだそうです。うちは三位四位パートになります。三位で出場するのは学校に余分なお

金をかけさせるので気が進みませんが、さりとて棄権するのは協会にも開催地にも学校にも選手にも保護者にも失礼になるので出場します。気が進まないと言っても、どうでもいいという気持ちで臨むのはもっと失礼になるので出るからには見に来ていただく方々に「観に来てよかった」と思ってもらえる試合ができるよう最大の努力を払います。

現状分析をします。正月合宿以後、釣屋・山下・山中の一年生ガードトリオを攻撃の軸にして試合を展開するのが最強ということはおわかったのですが、そのトリオが今大人の入り口で戸惑っています。個々の技量に問題はないのですが、その技量も「まだ一年生だから」という目で見れば「ヨシヨシ」であつても、チームの柱として見れば「この場面でそのプレイか？」と頭をかしげるプレイが数多く出ます。それをいちいち私から指摘されるので、この三人の脳は沸騰寸前だと思います。

加えて、釣屋・山下・山中・久松は不動のスタメンとしても、もう一人のスタメンが定着しないのが頭の痛いところです。私はもう一人のスタメンとして、川上・川口・木原の中から力強さを買って木原を育てようと思いましたが、県新人戦では木原の力強さで助かった場面があつたものの、木原の場面理解力不足による被害の方が目立ちました。

立志式というのがあります。十四歳で行う儀式ですが、これは昔の元服になつた儀式です。今、釣屋・山下・山中の三人は入学当初よりもパフォーマンスダウンしていると思いますが、それは私の見立てが間違つていてのではなく、彼女らがまだ真の意味での立志式を終えていないからだと思えます。立志式を終えるまであと何か月かかるのかわかりませんが、それは私の思いやりと非情にかかつていると思えます。

【結果報告】

初日

●試合内容がどうだったかということよりも、私の怒髪天を衝く思いを述べます。今日は二年生の修学旅行団が帰ってくる日。当初、試合の組合せがわかつていなかったため、修学旅行に参加した選手たちは初日の試合には間に合わないと思っていました。ところが試合が午後一時半開始と決まつたので、高速道路長崎道の金立(きんりゅう)サービスエリアで修学旅行団を拾うことができるようになったのです。午前十一時、佐賀大和ICで降りて金立から修学旅行団を乗せたあと試合会場に着くまでのバスの中は時々笑い声混じりのおしゃべりタイム。おそらく、話す側も聞く側も修学旅行中の話題で盛り上がっていたのだと思いますが、「今、九州大会の試合会場に向かうバスの中だぞ、それなのに九州大会モードではなくて修学旅行モードなのか?」と、運転しながら私の脳は沸騰していました。

昨年のこの大会は福岡で開催されました。その時も宿泊せずに二日間とも日帰りでした。今回も宿泊しないで三日間長崎から佐賀まで通います。この不況の中、学校の出費を出来るだけ軽減したいからです。ですが、私が長崎国体を見据えてどんなに思いを巡らしても、学校の経費節減のためにどんなに知恵を絞っても、選手たち全員がこの程度の思いしか持つていないのならば今すぐにでも廃部にしていいと思いました。この程度の思いしか持つていない選手たちならば、鶴鳴の誇りにも看板にもなれないからです。もちろん、私と同じ思いを持つている選手が必ず居るはずだということを願っていますが…

私は、ブログにしろ報告書にしろ、その中で選手を非難するような表現はしないよう心がけています。なぜなら、ペンの暴力ほど人を傷つけるものはないと思うからです。でも、今日は我慢できませんでした。すみません。

二日目

●だからといって試合を投げたりはしません。特に選手交替については気を使います。ミスしたらすぐ替えると、選手はそれが気になってプレイに集中できません。ですから、危ない前兆が現れたらミスする前に替えるか、ミスしても少しプレイをさせてから替えます。それでもこんな試合になってしまいます。一〇月二二日の選抜予選からずっと、「こいつら強くなった」とか「この相手はウチの方が格上だ」というような試合を、途中でお疲れモードになってズルズルッと落してしまいます。ウーン。

平成二四年四月 県下春季選手権 三位 スタメン 久松 釣屋 山中 川口 森塚

【案内文書】

展望を述べる前に今年度のスタッフの紹介をします。

監督 山崎純男 もうすぐ七〇歳 鶴鳴学園三五年目

コーチ 田口裕也 新任二七歳 長崎西高 福教大

主将 中村玲奈 西大村中出身 久松の負担を軽減するため分業

島原での春季選手権大会といえ、三五年前の大会が思い出されます。昭和五二年。私が鶴鳴高校に移籍してすぐ行われた大会でした。決勝で活水高校に負けました。当時、県内で鶴鳴が負けるなんて誰も思っていなかったので大騒ぎになりました。当時の鶴鳴の選手たちは、それまで三年ほど私が外部コーチとして携わっていたので全員顔見知りだというだけでなく、一人ひとりの性格からプレイの特徴まで私にはすべてわかっていましたし、選手たちも私がどんな人物であるかは充分わかってはいたのですが、これまで外部の指導者として「厳しい人」だったのが、身内の「厳しい人」になるとなれば心中穏やかではいられなかったのかもしれない。

さて、今年度から新コーチとして田口裕也先生を迎えました。田口先生自身もこれから緊張が続くであろうし、選手たちも対応の仕方に戸惑ったりすることがあるでしょう。加えて、こんなことがあると「山崎先生今年で辞めるの？」という噂が飛び交い、それに尾ひれが付いて広がったりします。そんなことへの対処も含めて、組織改革があった時の舵取りを間違えないようにするのは監督である私の重要な任務です。

【結果報告】

初日

春季選手権大会というのは、上級生が新入生を安心させられる存在なのかどうかを試される大会です。安心させられる存在というのは、出発前の準備、試合前や試合後の行動、翌日の準備などなど、プレイのことでだけでなくすべての面で模範的であり、且つ下級生に対して細かく気を配ってやれる上級生であるかどうかということの意味します。不合格です（また避難してしまいました。すみません）。

二日目

森塚のスタメン起用は島原で行われる大会なのでサービス起用だと思っっている人が多いようですがそうではありません。スタメンに欠かせない必須戦力です。スリーポイントがよく入るからではなく、目と勘がよいのです。私は、「今シュートを打つ」「今ドライブする」「今パスする」「今手を出す」「今逃げる」など、「今」がわかる選手を育てることを最重要事項とします。それを毎日のように指導しているのですが、それを自分のものにしたのは平成四年の一瀬、平成五年の鴨川、平成七年の櫻田、平成八年の工藤と大野の五人しかいません。そう簡単にマスターできるものではありませんが、どうやら六人目が出そうです。森塚の加入によって他の選手も刺激を受けて開花してくれば嬉しいのですが…。

最終日

訓練は、

もともと持っているものを磨く。

新しいものを取り込む。

の二つから成り立っています。その成果が、選手のプレイや目つきや態度などを通して私に「こいつ少しわかってきたようだ」とか「この子はほぼ把握したな」という感じで伝わってくればいいのですが、誰からもそんな感じは伝わってきません。ですから、セーフティリードでも射程距離ビハインドでも、「勝てる」とか「追いつける」と思えないのです。フーッ

平成二四年六月 県高総体 四位 スタメン 久松 川口 釣屋 山下 森塚

【案内文書】

四月の春季選手権以後、新入生の森塚をスタメンに起用しています。シュートに向かう選手だからです。そして、倉敷遠征も高校総体も、スタメンは久松・木原・釣屋・山中・森塚で行こうと思っていました。が、ゴールデンウィークの倉敷遠征では少し状況が変わってきました。

倉敷遠征では川口が木原に替わってスタメンに入りました。

倉敷遠征では山中よりも山下の起用回数が多くなりました。山中はちょっとだけスランプぎみ？

森塚は、相手の当たりが厳しくなるとまた力を発揮できません。

いつも最高得点をマークする久松には、相手の厳しい抵抗にあえば時々イージーシュートをポロリと落とすというクセがまだ残っています。

木原の「局面理解力不足」と「接触プレイに強い」という両刃の剣の使い分けがむずかしいです。

釣屋には、ゲームの流れを把握せず、個人の思いだけでプレイをしてしまうが一面がまだ残っています。ですから、これまでのスタメン構想は絶対的ではなくになりました。

倉敷遠征後、また少し状況が変わりました。

インフルエンザ患者が二人、普通の風邪患者が二人、主力選手から相次いで出ました。五月十四日には全員復帰しました。

倉敷遠征ではスタメンの座を確保した川口がまた消極的になりました。が、中旬以降は新しい技を覚えてまた復活しました。確固たる信念に基づいてプレイできるようになるまでにはこんなことの繰り返しなのだろうと思います。

久松が新しい技を自分のものにし、ちょっとだけ変身しました。

高校総体に向けて、インフルエンザや風邪で選手が揃わない期間に個人技の見直しをみっちりやることができ、久松や川口の個人技がレベルアップしました。それらがチームプレイに融合されれば展望が開けるますが、逆にチームプレーの練習期間が少なくなったので一人ひとりバラバラになる可能性もあります。試合結果はその調整如何です。

【結果報告】

初日

倉敷遠征以来ずっと降格させられ、Bチームでプレイしていた山中にAチームが手こずり、大会直前の二日連続AチームがBチームに負けました。今日も山中の一挙一動に目を配っていましたが、たまたまではなさそうです。また、これまで繋ぎでしかAチームでは起用したことのない川上も、憑き物が落ちたように生き生きとプレイしていました。今日の二人は牛若丸と弁慶のようでした。夢なら醒めないでほしい。

二日目

● 県高校総体はいろんなことに気を使います。試合運びのことでは、目の前で展開されている試合を見るのではなく、決勝リーグを見据えた策戦の実験をしなければなりませんし、選手起用のことでは決勝リーグに向けての個人の調子を診ることに加えて、応援団にサービスする選手起用も考えなければなりません。が、それも今日で終わりました。明日からは目の前の試合を勝つためだけにのみ私の脳をフル稼働させるだけ！

三日目

「なんとかなる」という糸口すら見つからないまま時間だけが過ぎていく試合の指揮を執らなければならぬのは辛いです。何度味わってもその辛さは変わりません。そんな試合展開は選手にもストレスが溜まります。そして、そんな時は往々にして事故が起るもの。久松が長崎西との試合で前十字靭帯を切りました。

最終日

昨日の午後三時半に大学病院での久松の診察が終わりました。私はその後短大に戻って試合のデータ処理と報告書作成をしました。夕方、主力選手には久松のケガの詳細と翌日の純心戦を私がどう戦おうとしているかについて話をしました。試合当日ではなく前日に話したのは、前もってイメージを創らせておきたかつ

たからです。私としては「ここで久松がいてくれたらなあ」と思った場面は一度もありませんでしたが、選手一人ひとりの中にまだちょっとだけ居座っている幼さが時々表に出て試合をモノにできませんでした。

平成二四年一〇月 ウィンターカップ予選 三位 スタメン 川口 釣屋 山下 山中 森塚

【案内文書】

六月の県高校総体で負けたあとの公式戦は、六月中旬の九州総体（四位だから出られず）、八月上旬のインターハイ（負けたから出られず）、八月中旬の九州国体（鶴鳴からは一人も選ばれていない）、九月下旬の県総合選手権（昨年から出場していない）ですが、カツコ内に書いているように全てに参加していません。ですから今度の試合は県高校総体後一三〇日ぶりの公式戦です。長いブランクなので、県高校総体後はまずグラウンドでの走り込みを多く取り入れました。すると次々と故障者が出たのでそれはやめました。夏休みに入ると午前午後の二部練習が続きましたが、夏休み前半は体育館内の温度が三五度を越えたり、湿度が七三%だったりする日が多く、練習メニューもきついのが続いたので途中でダウンする選手が出るなどして選手全員揃って練習できる日が少なく、中には熱中症で入院する選手も出て思うようにいきませんでした。

夏休み中盤、ディフェンスがひどいのに気付きました。二年生が主体なのでそうなのかなと思っていましたが、これはこのまま放っておいても来年も同じディフェンスしかできないということがわかり、それ以来練習の大半をディフェンス重視でやりました。こんなの初めてです。ディフェンスは要点さえ時々教えてあげばオフENSEのダミーをやっているだけでうまくなるはずなのに今年はそれではうまくならないのです。個人的には、山中を大改造する工事はまだ続いています。山下は手柄を立てるのですがそれを帳消しにする自滅プレイが時々出るのも相変わらずです。川上は夏の暑さにやられ、川口と木原に抜き去られました。木原と言えば、オフENSEもディフェンスも「読み」に欠けるところがありますが、リバウンドボール獲得の貢献度が捨てがたく、三点シューターの森塚に代わってスタメンで起用するようにしました。また、川口は長身者のわりには外角のシュートが入るのですがペイント内での勝負強さはまだまだなので、そういう意味でもペイント内で強い木原の存在が重要になってくるのです。

さて、木原・釣屋・山下・川口・山中のスタメンに森塚・古賀・森・川上・林田のバックアップでどこまで戦えるやら。後半失速しなければ久松が抜けたとはいえかなり戦えるチームになったと思います。

【結果報告】

三回目

長崎西・長崎商業・純心・鶴鳴の四チームは三回戦まで不戦勝で四回戦から登場。一〇月五日付の試合案内では、九月下旬に木原が森塚に替わってスタメンの座を奪い取ったとお知らせしました。これで力強くなるぞと思っていましたが、その木原が一〇月十一日、中間テスト明けに太ももを痛めてしまいチーム練習から外さなければならなくなりました。今日の試合にも出していません。なので今日の試合はまた森塚がスタメンに復帰しました。木原を十一日以降チーム練習から外し、今日も試合に出さなかったのは、木原のケガが肉離れの初期症状だと思ったからです。今無理して使えばほんものの肉離れになってしまうので休ませ、月曜日から少しずつ身体を動かして来週は試合に出そうと思っています。

このところ森塚をスタメンから降ろしていたのは、ディフェンスがダメすぎるからです。森塚をスタメンから降ろしてスタメンの相手チームに入れてスクリメージを繰り返してきましたが、その間森塚のディフェンスについては何も手を加えていないにもかかわらず、今日久しぶりにスタメンに戻ってきた森塚が素晴らしいディフェンスをするではありませんか…。なにがどうなったのやらわかりません。

最終日

長崎西の圧倒的強さの前に針の穴ほどのつけ込む隙すら見い出せないまま終わってしまった試合でした。鶴鳴はこの夏強くなったと思いますし、その片鱗はこの試合でもあちこちで見られました。しかし、さらに層が厚くなった長崎西の力がそれを粉碎したということです。やられたプレイも起こしたミスも、この選手

ならばそういうことはあり得るだろうという想定内の出来事なので大したダメージはありません。もっと速攻の練習をさせなければならなかったとか、もっとハーフコートオフエンスの練習に時間を割かなければならなかったなどの反省材料もありません。夏以降、与えられた時間で必要不可欠なことは精一杯やってきました。そしてそれを選手は試合でやってくれました。ではなぜこんな負け方を？と言われれば、やったことが個々の選手の身体にしみ込むにはもう少し時間が必要だということなのでしょう。

平成二四年十一月 長崎地区新人戦 二位 スタメン 川口 釣屋 山下 山中 森塚
平成二五年度のチーム構成

三年生 梶平(マネ時津) 釣屋(光海) 山下(光海) 川口(岩屋) 木原(西浦上) 山中(滑石) 村岡(梅香崎)
二年生 古賀(マネ山里) 森塚(布津) 古賀(布津) 小林(布津) 森(小江原) 井手(飯盛) 糸山(片淵)
一年生 梶山(光海) 岩松(光海) 平田(緑が丘) 渡部(三重) 高尾(淵) 宮本(淵) 戸高(横浜山手)

【案内文書】

選抜予選で負けた三日後のブログに私は次のようなことを書きました。

試合の翌日はオフだったので昨日が選抜予選明けの初練習だった。月曜日は短大の授業が満杯なので練習には少し遅れる。高校に到着したらスクリメージの二本目が始まっていた。シュンとしている。四本目が終わったところでみんなを集めて感想を述べた。「大差で負けたからこの雰囲気なのか？ お前達は夏以降強くなったんじゃないのか？ 長崎西戦は頑張ったんだろ？ それでも相手がそれ以上強かったというだけだろ？ ならば、次の地区新人戦に向けて今日は張り切って練習しなければならんんじゃないのか？ なぜならお前たちだけが他のチームと違ってメンバーの入れ替えがなく、このまま戦えるのだから」私のことばが選手たちの心にどこまで響いたかわからないが、私はそんな気持ちでコートに立つ

それから三週間が過ぎました。その間、三年生を相手にスクリメージをたくさんやりました。皮肉なことに川口と木原に追い越された川上が選抜予選後積極的になって巧くなりました。それに呼応して林田も巧くなりました。「なぜ今頃巧くなるんだよ……！」この二人に加え、もともと巧かった吉田の三人に翻弄されて新チームは苦戦しています。

個人的には、スタメンの座を占めた木原が再び森塚に追い越されてベンチスタートになりました。大改造中の山中は自分の問題点がわかってそれを解決すべく努力を続けていますが、その時の場面や雰囲気はまだよく分かっていないのでトライしてもそれが自滅に繋がる場面がしばしばあります。しかしトライしての自滅なのでそれはあとで財産となって返ってくるでしょう。川口がもどかしい。彼女の中学時代を思うと同一人一物とは思えないほど成長しました。が、獲得した技術を実行する段階になって躊躇するのです。やって失敗するのは財産として見込めますが、やらないのは財産として計算できません。

一年生の中では森塚を筆頭に古賀と森までは戦力として見込めます。が、森塚のディフェンスの甘さももう少し改善されないとチームとしては安定しません。今のところ、川口と山中と森塚が皮剥けるのにどれくらいかかるかが力ギです。木原については、木原自身の改良ではなくこちらが木原の起用方法を間違えなければ済むことです。

【結果報告】

初日

大差の試合であっても、コートに送り出す選手にはちゃんとしたチェック項目があります。その対象になるのは釣屋・木原・山下・山中・森塚・古賀(智)・森・小林・川口の九人です。それ以外は、日頃下働きが多いので少しでも公式戦に出してやりたいと思ってコートに送り出す選手たちです。その対象は村岡・糸山・井手の三人。それも、一分とか二分とかではなく、出すなら一ピリオドは出してやりたい。そうなるとう

年生の糸山と井手の二人しか出してやることができず、二年生の村岡には昨年もチャンスを与えたので今回はがまんしてもらいました。釣屋・山下・山中・川口の四人がもう少ししっかりしてくれば村岡にも出番を回してやれたのですが…。主役を担うならそんなこともわかって部活に取り組んで欲しいと思います。

最終日

昨夜はなかなか寝付けなかったし、今朝は早くから目が覚めました。目は覚めたけれどもまだ外は真っ暗なのでフトンの中から出ず、目をつぶって夜が明けるのを待ちました。その間次々と選手の顔や試合の場面が登場します。イメージを描いて試合の構想を練ろうと思っっているわけではないのですが勝手に登場するのです。それを振り払って眠ろうとしますが選手の顔や試合の場面がなかなか消えません。仕方なくまだ薄暗い中を起きあがって高校の体育教官室に行き、パソコンを開きました。

試合前夜にこんな状態になるのは、昭和四八年八月の全国中学大会決勝戦前夜以来です。その後、インターハイや国体で何度も、翌日に厳しい試合を控えた夜を経験したことはありますが、全国中学大会決勝戦前夜のようなことはありませんでした。今回は三九年ぶりに味わう試合前夜の緊張感でした。それが、高校総体や選抜予選など、全国大会の切符がかかった試合ではなく、シーズンが始まったばかりの地区新人戦なのに…

たぶん、チーム内での中間管理職を育ててきていないという不安がそういう現象になって現れたのだと思います。試合結果もそれが的中した結果になりました。一月の県新人戦までにはすっかり中間管理職を育てなければなりません。

閑話休題

山崎純男のホームページ 日々の出来事より

平成二四年十二月一日(土) スリーポイントシューターの森塚麗が膝をケガした。左コーナーからドリブルストップジャンプショットをして着地した瞬間に膝崩れを起こしたのだ。非接触の自損事故である。応急処置はしたがおそらく前十字靭帯を切ったと思われる。森塚はディフェンスが悪く、それは姿勢と足捌きに問題があるからだとわかっていたので矯正中だった。山中も同じ傾向にあるので、この二人の矯正と特訓のためにディフェンス練習の特別メニューを作り、選抜予選以降毎日それに時間を割いていた矢先の出来事だった。森塚も山中も、ディフェンスの急な動きだしと急なストップの場面で、足幅が広くなり、膝と足首を結ぶ線が床に対してハの字になるクセがある。この動作は動きが遅くなるだけでなく、前十字靭帯損傷が最も起こりやすい姿勢なのである。着地やストップの姿勢は、どんなに急激な動きであっても膝と足首を結ぶ線が床と垂直(スピードがついていれば床とは斜めになるが、下腿は互いに平行を保つ)にならない。ウーン。残念無念！

平成二五年一月 県高校新人戦 三位 スタメン 川口 釣屋 山下 山中 木原

【案内文書】

十一月の地区新人戦の結果報告に、「試合前夜に眠れなかったのは三九年ぶりだ。たぶん、チーム内での中間管理職を育ててきていないという不安がそういう現象になって現れたのだと思う」と書きました。あれから五二日経過しましたがまだ中間管理職は育っていません。以前は、中間管理職も総務(マネージャー)も社員(選手)も通常の練習をしていれば自然と役職に見合った仕事をするようになり、組織ができていきました。今はそれぞれの役職の者を意図的に育てなければならぬ時代になっています。手がかかります。

県新人戦以後変わったのは十二月一日にシューターの森塚が前十字靭帯を切ったことです。彼女はまだ一年生なので、今はがまんさせて二年生から復帰させるため一月八日に手術を受けさせました。その代替え選手は木原です。木原は森塚とは全く違うタイプで、ポイント内で力を発揮する選手です。だから試合の組み立て方も変えなければなりません。その重要なポイントは、川口と木原が互いに邪魔にならないような動き

を作り、当事者だけでなく他の三人にも、川口木原の性格的特徴まで捉えた動きを理解させることです。

それを、冬休みの二部練習及び正月合宿で徹底的に仕込みましたが完成品と言えるものはまだ出来上がっていません。これまでの指導歴の中で、完成品と言えるまでに五年もかかった作品があるので、二ヶ月や三ヶ月という短期間で完成品を作れるとは思っていませんが、完成品作りを目指す過程で選手に「これならいけるかもしれない」とか「すこしわかってきたぞ」という気持ちをもたせられれば完成品でなくても試合はやれます。選手にそういう気持ちを持たせるのは私の役目です。

【結果報告】

初日

十二月末、二泊三日で鹿屋体育大学に遠征しました。まあまあ出来でした。その後、暮れから新年にかけて四日間休んで、二日から六日までの五日間恒例の正月合宿を行いました。北海道から鹿児島まで計一〇チームが参加してくれました。滞在日数は、少ないチームで一泊二日、多いチームは三泊四日といろいろでしたが、ホスト校の鶴鳴はまるまる五日間全チームと対戦したので集中力を保てず、勝つべきチームに負けたりした試合もありました。でも、総合診断はマルです。

が、練習再開の八日以降ずっと練習が重い。なので、成人の日を含んだ三連休は遠征又は招待で終日練習試合を予定していましたがそれをとりやめ、十二日と十三日はAM練習のみで、成人の日はオフにしました。それでもまだ重い。加えて釣屋が大会直前に嘔吐下痢症になり、チームの調子を把握できないまま大会初日を迎えることになりました。明日の試合で様子を見ながら調子を整えなければなりません。

二日目

釣屋に引き続いて嘔吐下痢症になった選手が数人いた事を今日初めて知りました。なぜこんなに動きが重いのだろうと思っていました。嘔吐下痢症では本来の動きができるはずがありません。選手にしてみれば大事な試合の時に体調不良になったので私に申告できなかったのでしょうか、たとえ申告がなくても異常に気付かなければ監督を標榜する資格はありません。痛恨の極みです。

釣屋は完治。ほぼ治っているのが山中。山下と木原は点滴をもらうために保護者に病院へ連れて行ってもらいました。川口と一年生は全員元気です。明日川口が発症しなければ、釣屋・川口・森・古賀・小林にクレインズの屋台骨を背負って貰わなければなりません。

最終日

長崎西戦の滑り出し八分の不出来は、嘔吐下痢症の影響によるものではなく、入学以来改修できないままになっている各自の弱点のオンパレードが原因でした。「これをきっかけに……」という場面は数回ありましたが、「弱点を克服するために努力した」という自負心がなければ、そんな場面があっても「ヨシ、ここから！」という気持ちにはなれません。だから、A選手が弱点を露呈すればB選手も弱点を露呈するというように、弱点露呈の連鎖反応で試合が進みました。途中でいくらか本来の出来に近くはなったものの時すでに遅し。完敗でした。

平成二五年 二月全九州高校春季選手権Bパート二位 スタメン川口 釣屋 山下 山中 木原

【案内文書】

十二月一日に森塚が前十字靱帯を切つて以来、釣屋・木原・山下・山中・古賀(智)・森・川口の中から誰をスタメンにすればうまく行くのかを探っていますが結論ができません。釣屋・山中・川口・山下はまず外せないとは思いますがそれとて不動ではありません。残りの四人から一人選出しなければなりません。それが難しいのです。「こいつで行いってみよう」と思って起用してみますが、主戦力の相手側でプレイさせればなかなかやる選手なのに、主戦力側でやらせると目を覆いたくなるような弱点が露呈してしまいます。「こいつは合格」と判を押せない選手は二つのタイプに分かれます。

タイプA＝わからないからできない。

タイプBはわかってはいるけどやらない。タイプBはさらに細かく分かります。

怠け者だからやらない。

結果を恐れて踏み出せない。

バスケットのセオリー優先ではなく、「自分はこうやりたかった」が優先される。

タイプAやタイプB が日替わり定食のように現れ、その味が日によってまちまちだからどれが一番おいしいのかわかりません。そんなことの繰り返しで二ヶ月があっという間に過ぎてしまいました。それも、中間管理職が育つていれば私の手間も少しは省けるのですが、それも育成途中だから二重の労力が要ります。そんな経緯で臨む九州大会なので、どんな結果になるのか予想ができません。普通、新チームになって正月が過ぎれば、どこのチームでも遠征や招待合宿などをやって自他の戦力を分析し、「今年はインターハイに行けそうだ」とか「今年は厳しいぞ」という状況を把握しているものですが、ここ数年の鶴鳴は味がまちまちの日替わり定食なので予想が立たないのです。

だから、試合の入り方や進行具合を見てその試合の策を練るのがこのところの私のベンチワークとなっています。たとえ日替わり定食でも、平成二五年度は翌年の国体に向けてクレイNZは長崎県バスケットボール界に弾みをつけるための先陣を切る役割を背負わなければならないと思うので、今大会はその見通しが立つ試合をしたいと思います。

【結果報告】

初日

今シーズン最高の出来でした。勝ったからではなく、接戦を制したからでもなく、心身ともに充実した試合をしてきたからです。夏休み以降力を入れてきたディフェンスの強化について、「もっと時間が欲しかったなあ」という思いのまま今大会を迎えてしまいました。その心配を払拭する試合をしてきました。特に、熊本商業戦で相手のセンター（六番）をマークしていた川口が二本立て続けにやられました。その二本を見て釣屋が自主的にマークを替わったのは舌を巻きました。これは私の指示ではありません。釣屋は六番と正対したディフェンスでは完璧に守りましたが、相手も今度はミスマッチを突いて裏を攻めてきます。それを読んで今度は木原が、川口が、山下が見事にカバーして逆にマイボールにしてしまったのです。もちろん私も指示を出しましたが、選手が試合中に学習し、その成果を見せてくれた試合は今大会が初めてです。

最終日

準決勝までは、前日同様今期最高の試合をしてきました。が、決勝戦は為す術なくやられてしまいました。これが現段階の真の力ですが、そこに目を向けるのではなく、それまでの三試合に目を向けてやりたいと思います。主戦力が五人ぎりぎりしかない上に、一人ひとりが大改造しなければならぬ箇所を持ちながらの一年間だったので、今大会は「よくぞここまで成長した」と言っただけです。

成長したと言っても一年前の彼女等に比べればという意味であって、到達目標にはまだまだ遠いです。ですから明日の朝練からすぐ改修作業にとりかかります。一分一秒が惜しいですから。

さて私は、平成二五年三月末で鶴鳴学園を去ります。よって、山崎純男による長崎女子高校のバスケットボール案内報告はこれをもって最終回となります。長い間のご支援ありがとうございました。二年後の長崎国体まではなんとしても踏ん張って鶴鳴学園に恩返しをしたかったし、情熱も知恵も体力もまだまだもう少し残っています。ここ四年間運気を変えることができました。申し訳ありません。なお、四月からは田口裕也新監督があとを引き継ぎますのでこれまで同様ご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成二五年三月 左膝関節軟骨の大手術

【ブログで詳細を説明しているが回顧録でも再掲する】

平成二五年一月七日（月）

正月合宿四日目の審判中、左膝が張っている感じがした。それが日を追う毎にひどくなり、今日は膝を完全に伸ばすことができない。私の膝は左右とも二回ずつ手術をしているが、そろそろ膝の内部の掃除をしなければならぬ時期が来たのかもしれない。前回の手術は平成二十一年八月七日だった。

平成二十五年一月九日（水）

昨日檜林医院で膝の水を抜いてきた。三—ccだった。茶色に濁っているかなと思っただがべっ甲色だったので少しホツとした。私の膝の軟骨は左右ともポロポロで、内視鏡で見ると月面クレーター状態である。本当は走ってはいけない膝なのだが、前回の手術後三年間も走り続けてきたのが今回の水腫の原因だと思う。水を抜く前に大病院でMRIの申込みをしたので来週にでも三年間のダメージがどれくらいのものか判明するだろう。

平成二十五年一月二十五日（金）

前回のMRI（平成二十一年六月三〇日）との比較。膝蓋大腿関節内側→正中部の関節軟骨の、不整・菲薄化・信号上昇や欠損がやや上昇している。大腿脛骨関節の内側区画主体にも関節軟骨に比較的広範囲に菲薄化・欠損、軽度の辺縁部骨棘の形成が見られるが、これらは前回と大差ない。内側半月板の中節→後節に変性、水平断裂があり、後節の遊離縁に垂直断裂が疑われる。これらの損傷はやや増強している。外側半月板は不完全型の円板状半月板のようだが、変性のみのものである。MCL（内側側副靭帯）の大腿骨側に信号上昇があり、変形性関節症などに伴う変性が考えやすい。明らかな完全断裂はない。そのほかの靭帯に明らかな断裂はない。有意な関節液の増加はないが、BAKER嚢胞（膝窩嚢胞）膝の裏の窪みにできた袋）が前回より増大している。明らかな関節遊離体（ネズミ）はない。

平成二十五年一月二十九日（火）

私の膝の手術は、米倉医師が無理してスケジュールを調整してくれても、可能性があるのが三月十一日（月）だけしかない。それがアウトだともう四月以降だ。膝の手術はこれで五回目になる。右が二回、左が三回目だ。この際自分の故障や病気の履歴を思い出してみた。大きなものだけを挙げると、

三七歳の時にナットクラッカー症候群（腎静脈の狭窄）を患った。この時は絶対安静が四ヶ月と二日。退院後も再発安静の繰り返しで、通常の生活に戻るのに都合二年弱かった。

五二歳の時に食道潰瘍を患った。治って再発治って再発の繰り返しで、服薬不要になるまで通算三年かかったがこれは通院だけで済んだ。

五七歳の時にマイクロバスのラジエーターを点検していて足を滑らせ、吹き出した蒸気で尻から下全部に大やけどを負い、生死の境を彷徨った。うつ伏せのままの入院でとても辛かった（前述）。

六〇歳の時、深夜に突然の腹痛に見舞われ緊急入院した。大腸憩室炎だった。夜通し七転八倒の苦しみを味わった（後述）。

六六歳の時右肩腱板断裂の修復手術を受けようとしたが、麻酔科の医師から待ったがかかり、手術しないうえに退院した。だから私の右肩の腱板は四cm×5cmの幅で断裂したままで、それに伴って棘上筋と棘下筋は千切れていて機能していないし、左右とも上腕二頭筋腱の長頭は擦り切れかかっているか擦り切れちゃって使えなくなっている。麻酔科の医師からストップがかかった理由は、私の心電図はブルガダ症候群の疑いがあるので再検査してOKが出ないと全身麻酔ができないというのだ。それ以来、循環器の専門医からは検査しろと検査しろと言われるけれども、四〇歳の時から私の心電図はST上昇という心電図異常なのにそれから三〇年も生きているから今更検査を受ける気にはならない。でも最近、心房細動という名前をつけて貰って血液サラサラのクスリを毎日しぶしぶ飲んでる。というわけで、私の身体は廃車寸前だ。

平成二十五年二月二二日（金）

三月十一日の手術のための術前検査で大病院に行った。八時半に受け付けをして、血液検査 心電図 呼吸器の検査 麻酔科での説明 手術担当医の診察と説明 入院要領の事務的説明と、すべて終わって大学

病院の玄関を出たのが午後一時五〇分だった。「そんなことわかってるって！」と言いたいようなことを各部署で各担当がていねいに説明してくれる。特に麻酔科ではビデオを見せたりして微に入り細にわたって説明してくれた。こっちとしては「もう七〇年も生きてきたのだから麻酔中に突然死したって文句は言わないよ」と思っているけれども、何かあればすぐ訴訟を起こされる昨今、慎重の上にも慎重になるのだろう。教育現場も大変だが、医療に携わる方達はもっと大変だ。本日の診療費は一万九四〇円だった。

平成二五年三月四日(月)

今日は短大の学内研究成果発表会。幼児教育学科からは私が指名されて発表した。持ち時間は十五分。本当は十二時三〇分が終了時間だが、私は午後一時に大病院に入院することになっていたので自分の発表が終わったら退席させてもらった。入院のことについて述べておきたい。私は十一日の午後から左膝の三回目の手術を受ける。鏡視下で行う簡単な手術だ。前回は一泊二日で退院した。今回手術一週間前から入院するのは、血栓ができないようにするためにプラザキサというクスリを服用しているが、手術前一週間はそのクスリの服用を止め、替わりにヘパリンというクスリを点滴で入れなければならぬからだ。入院期間が一〇日になったからといって重傷なのでも大手術なのでもない。だから見舞いは固くお断りする。

平成二五年三月五日(火)

ヘパリン点滴は、一時間とか二時間で終わりというのではなく、二四時間つなぎっ放しだ。だからトイレに行くにも点滴の機器をガラガラ引っ張って行かなければならない。手首には氏名とバーコード付きのリストバンドを付けられた。リストバンドを指さして「これ、脱走防止用？患者が病院から抜け出したらピーッとどこかでブザーが鳴るの？」と看護師さんに聞いた。看護師さんはゲラゲラ笑いながら「万引き防止じゃあるまいし、そんなことありませんよ」と言った。看護師が病室巡回時に、患者のリストバンドにバーコード読み取り機を当ててパソコンからカルテを呼び出し、日々の記録を書き込むのだ。病棟は明るく、薄暗くて臭い昔の大病院とはだいぶ違う。

平成二五年三月六日(水)

昨夜の言動でちょっと反省している。昨日入院して初めてシャワーを浴びたが、シャワーを浴びる時には点滴の電源コードを外して点滴針はそのまま残し、点滴針周辺に防水テープを貼らなければならない。けっこうやかいだ。シャワーが終わって看護師さんにテープを剥がしてもらい、ベッドに戻ったが針の差し込み口あたりが少し赤くなっている。夜の当番の看護師さんに「ちょっと赤くなっていると思いませんか？」と聞いた。「痛いですか？」と聞き返されたので「こっちはまだ少し痛いけどこっちは痛くありません」と答えた。看護師さんは交替制なのでその日その日で担当が替わる。

今朝、入院時に点滴をしてくれた看護師さんが病室に来た。今日は彼女は私の当番ではない。彼女と私の会話。「山崎さん痛いですか？」「え？何が？」「点滴失敗の痕」「あ、いやいやたいしたことない大丈夫だよ」。私は昨夜の看護師さんの「痛いですか？」に対して痛さを比較するならというつもりで説明したのであって、初回の点滴失敗をとがめたつもりはまったくなかったが、看護師の引き継ぎ事項に記載されていたか昨夜の看護師さんから伝えられたのだろう。結果的に私の言葉は初回の看護師さんの点滴失敗を蒸し返すことになってしまった。申し訳ない。

平成二五年三月七日(木)

入院四日目。一番大変なのが食事だ。いつも、まともに食事をするのは一日一回なのにここでは朝八時・昼十二時・夕方六時ときっちり三食出る。一日一八〇〇キロカロリーだ。食べたくないのならば残せばいいのだが私にはそれができない。食材を作った人、料理をした人に申し訳ないからだ。だから、ごはんだけは残すことがあるが他は全部食べる。そのごはんも明日からは抜いて貰うことにした。このままだと入院中に太る。

平成二五年三月八日(金)

起床六時、消灯九時。朝昼夜の検温と血圧測定時以外は必ずベッドに居なければならぬということはない

いのだが点滴の機器を引きずって動くのがめんどくさいからほとんど病室から動かない。だから、毎日一時半から十一時半までの術前リハビリが唯一のストレッチ解消時間だ。リハビリのメニューはストレッチ・腹筋・背筋・大臀筋の強化それにバイクである。入院二日目は自分の足を見て「ふとももが細くなったかな」と思ったが、三日目からメニューに入ったバイクをバリバリ漕ぐので太さが元に戻ったようだ。

平成二五年三月九日（土）

午前三時に目が醒めた。昨日は五時だった。九時に寝るなんて日常生活ではあり得ないことなので早く目が醒めるのは仕方がない。そーんなに早く起きて昼間何をしているかというところ、マンガを読んだりパソコンで仕事をしたりしている。病室では、マナーモードにしておけば携帯メールはできるし、モバイル端末につないだパソコンでインターネットも仕事も出来る。病室に持ち込んだパソコンで仕事をしたのは、短大研究室のデスクトップパソコンと高校体育教官室のノートパソコンにも取り込まなければならぬが、今ここで仕事をした分のファイルは二二個USBメモリースティックに入っている。退院したらそれを両パソコンにコピーすればよい。便利な世の中になった

平成三年三月一〇日（日）

昨夜はほとんど眠れなかった。レンドルミンを一個半飲んだがそれでもだめだった。朝、点滴の針の差し込み口から血が滲んでいた。ヘパリンは血液をサラサラにするクスリだから動かしすぎると穿刺口から出血しやすくなるのだそうだ。布団やシーツにも血が付いていた。今夜九時から絶飲食で明日午後二時から手術の予定だ。全身麻酔は初めてだ。麻酔薬は点滴針から注入するというのを初めて知った。麻酔が効き始めると自呼吸も止まるのでその間挿管して人工呼吸器で呼吸を管理するのだそうだ。知らなかった。過去四回の榎林医院での手術はすべて腰椎麻酔で、さっさと手術を済ませてさっさと退院したが、大学病院ではそう簡単にはいかないようだ。

平成二五年三月十一日（月）

午後二時手術開始

平成二五年三月十二日（火）

昨日午後三時四五分生還。おサラの向かい側の大腿骨の軟骨がすり減っていたのがさらに広がり、差し渡し5cmほどのクレーターになっていたので、そこに四〇箇所ドリルで穴を開け、骨髓液を滲み出させる手術をしたのと、血液サラサラのクスリを使っているのと傷口からの出血が止まらない。朝、膝の包帯も布団もシーツも血だらけだった。だから今日は松葉杖歩行もトイレのみでそれ以外はベッドの上だ。

私は過去四回の手術が鏡視下で掃除をする（デブリードメント）程度だと思っていたし、米倉医師もそのつもりだったようだが、今回は軟骨がなくなっている部分が広範囲だったので、間に合わせの処置をするのではなく、これでダメならあとは人工関節しかないというドリリングで四〇箇所に穴を開けるという手術に踏み切ったのだそうである。

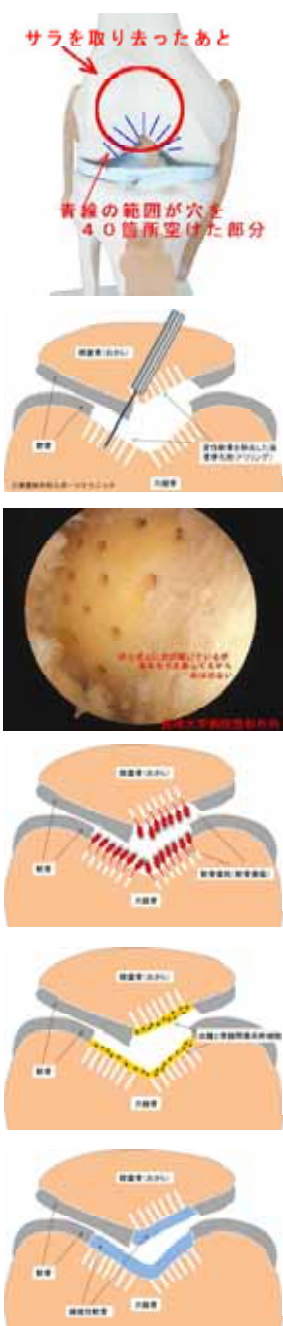
平成二五年三月十三日（水）

昨日夕方の主治医回診の時の出血は、傷口のガーゼを直径5cmほど染めていただけだった。しかし、膝はパンパンに腫れている。骨に空けた四〇箇所の穴から関節内にどんどん出血しているのだ。腫れると内圧で膝が痛くなる。だから血を抜いてもらった。注射器二本。四五ccだった。今朝もパンパンに腫れている。しかし、血が溜まったら抜けばいいというものでもない。血が溜まった内圧で骨に空けた穴から吹き出してくる血を押さえるという意味もあるので、血が溜まったからといって毎回抜くのもよくないのだ。難しい。午後の回診では出血していなかったため包帯は外した。膝には関節鏡と器具を差し込んだ小さな傷が二つ。しかし関節の中は大工事だ。

これまで四回やってもらった手術はでこぼこの軟骨を削って滑らかにする（デブリードメント）だけだったので出血もなく、さっさと退院してさっさと復帰したが今回の手術は骨に四〇箇所穴を開けているのでさう簡単にはいかない。そんな手術だとは知らなかったため、これまで四回の手術の経緯から私は十四日に退

院したいと申し出て、医師もそれをしづしづ了解してくれていたのだが本当は十四日退院は無理のようだ。私が十四日に退院の申し出をしたのは、十五日が短大の卒業式、十六日が招待強化試合、十七日は千葉から研修来客、十八日が県の競技力向上委員会、十九日は短大幼児教育科の送別会、二十一日は歯医者、二十二日は短大職員研修、二十四日はつばさ保育園卒園式、二十六日からずっと遠征と、やらなければならぬことが目白押しだからだ。今日と明日で、どうするのが最善か考えなければならぬ。

平成二五年三月十四日(木)



昨夜九時過ぎ、米倉医師が和人会病院勤務からわざわざ大学病院に戻ってきて説明してくれた。私の膝関節は最上段の図の状態なのだ。治療は上から二番目と三番目の図のように骨にドリルで骨に穴を空ける。そうすると上から四番目の図のように血液(骨髄液)がしみ出してくる。時間の経過とともに骨髄細胞が繊維性軟骨に変わってきて下から二番目の図の状態になり、最終的に最下段の図の状態になるという仕組みらしい。最下段の図の状態になるのに約四ヶ月かかるのだそうだ。

それまでは歩行以上の動きをしてはならず、階段の昇降すらそろそろしなければならぬと言われた。走るなんてとんでもない。米倉医師は自分のキャリアの中で、これほど多くの穴を開けた手術をしたのは私が初めての患者だと言った。少年期ならまだしも、私は七〇歳という高齢なので軟骨が再生するのは難しいと思うがりハビリを頑張る。

私は米倉医師と相談の上、予定通り今日午後二時に退院する。膝にはパンパンに血が溜まっているが、今週土曜日の午後米倉医師が鶴鳴の近くの榎林整形外科医院に出張して血を抜いてくれることになった。その後は榎林医院の院長にケアしてもらう。米倉医師にも学校やチーム関係者にもずいぶんわがままを言って迷惑をかけたが、私の気持ちはもうコートに飛んでいる。今は一刻も早くチームの状態をこの目で見たい。

平成二五年三月十六日(土)

退院する日の午前中からすでに左足はむくんでいたが、昨夜服を脱いだ時に膝の裏から足首までの至る所に皮下出血があるのに気付いた。関節内では治まらず関節外に滲み出てきたのだ。退院後は極力身体を動かさず、体育館でも椅子を二つ持ち出して一方に座ってもう一方に左足を乗せて練習を見ている。それでもこつたる。

午後、榎林医院に米倉医師が出張診察に来てくれた。血は溜まっているが、パンパンではないので血だまりの圧でドリリング穴からの出血を押さえる意味で、来週土曜日まで血を抜くのを延ばした。時間の経過とともに出血量は少なくなっていくだろうが、「もう止まりましたよ」と言えるまでにはまだしばらく時間がかかりそうだ。

平成二五年三月二三日(土)

今日は膝の診察日。膝関節内の血腫も小さくなっていたので血を抜くのは今日も見送り。浮腫も皮下出血も面積が狭まっている。時間の経過とともに元に帰っていくのだろう。

以後、両松葉杖が片松葉杖になり、やがて松葉杖なしになるが、軟骨の再生は四ヶ月かかるので七月十一日までは膝を曲げて体重をかけることは禁止である。だから、手術後の山口遠征も四月の四国遠征も私のバスではなくバレー部のマイクロバスを借りて行った。私のバスはマニュアル車なのでクラッチ操作のために膝を曲げ伸ばししなければならない。それができないのだ。七月十一日以降は自分のマイクロバスを運転できるようにしたが、七月中旬の時点でもまだ走ったり跳んだりするのはおろか、階段昇降すら片足一段ず

つで上り下りするほど用心している。今回は長くかかりそうだ。

四 体育学会

平成二五年三月十九日に、短大幼児教育学科の先生たちが送別会を開いてくれた。その時S先生が「先生、ずばり一言で、短大幼児教育学科在籍期間の感想を聞かせてください」と私に質問をした。私は即座に「苦しかった！の一言です」と答えた。続けて私はその説明をした。「短大での九年間は寝ても覚めても論文のことがアタマから離れず、論文に追い回された九年間でした。それがとても苦しかったです」

私は平成十六年の四月一日付けで短大に移籍した。受け持つ授業は幼児教育学科一年生の体育実技と体育講義それに二年生のゼミだった。肩書きは長崎女子短期大学幼児教育学科教授だ。理事長の意図は、高校の教員としては定年を過ぎている私に引き続きバスケットボールの指導をさせることだった。そのため、高校よりも定年が遅い短大に私を移籍させたのだ。だから理事長は、短大の授業が終われば私が高校のバスケットボールの指導に行けるように、短大での私の授業時間割や仕事内容もいろいろ配慮してくれた。

そのことを言い渡されたのは平成十五年の夏、長崎インターハイが終わったあとだった。自分の中では鶴鳴の定年退職後十一年後に開催される二巡目の長崎国体までは現場に立つ指導者として長崎県のバスケットボール界に貢献したいとは思っていたが、私は長崎インターハイの年にすでに通常の定年を一年伸ばして貰っていたので、鶴鳴の教員として残って現場の指揮を執ることなどまったく考えていなかった。だから、理事長から継続を申し渡されたときはその後の展開が読めずアタマが混乱した。

まず驚いたのが肩書きである。私は大学院卒でもないし大学の教授を標榜できるような論文など書いたことがないのに、そんな者が大学の教授になれるのだらうかと疑問に思った。そして調べた。すると文部科学省が定めた大学設置基準というのがあることを知った。その中に「第四章教員の資格」というのがあり、さらにその中に「第十四条教授の資格」というのがある。こう書いてある。

教授となることのできる者は、次の各号のいずれかに該当し、かつ、大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者とする。

- 一 博士の学位(外国において授与されたこれに相当する学位を含む。)を有し、研究上の業績を有する者
 - 二 研究上の業績が前号の者に準ずると認められる者
 - 三 学位規則(昭和二十八年文部省令第九号)第五条の二に規定する専門職学位(外国において授与されたこれに相当する学位を含む)を有し、当該専門職学位の専攻分野に関する実務上の業績を有する者
 - 四 大学において教授、准教授又は専任の講師の経歴(外国におけるこれらに相当する教員としての経歴を含む)のある者
 - 五 芸術、体育等については、特殊な技能に秀でていると認められる者
 - 六 専攻分野について、特に優れた知識及び経験を有すると認められる者
- これを読んで、大学の教授には博士論文を書いたり大学院を卒業しなくてもなれるのだということを知った。たぶん私は、五や六の項目に該当したのだと思う。例えば私が出した本。三冊あるがそれはバスケットボールの指導者としての参考書であり、私がこれから受け持つとしていた幼児教育の分野の本ではない。その本の中にスポーツ医学についての調査研究の結果も述べているが、データの比較検証など、学術的なものは何も述べていない。が、私が教授となる条件にはカウントされるのだ。なぜならそれが自費出版ではなく出版社から出された本だからである。

また、バスケットボールの指導者という観点から見れば、ジュニアチームであれナショナルチームであれ、日本代表チームのスタッフになればそれもカウントされる。また、講演会や演奏会もカウントになる。講演会や演奏会ならどれでもいいというわけではないがそれをどこが主催しているかとか、受講者はどんな人たちが集まるのが重要で、それが社会的に質が高いと判定される講演会の講師を務めればそれもカウントさ

れるのだ。要するに、社会的に認められる実績が重要なのである。

というわけで私は自分の肩書きに対して少しだけ納得したが、大学教授を名乗るならばそれにふさわしくなければならぬと思った。二年生のゼミというのは、学生数人のグループを受け持ち、研究テーマを決めて調査・実験・実習を通して学習させ、最後に卒業研究発表会というかたちで学外からの参加者を含めた聴衆の中で発表をさせる授業である。テーマは学生が決めるのではなく、私のゼミでは「幼児の足趾形態の発育発達について」というテーマで継続研究していくことに決めた。その理由は、私は過去二五年間のバスケットボールコーチを務めている間に積み上げたスポーツ医学の研究の実績があり、それを足的を絞って研究すれば、それは将来こどもを扱う職業に就く幼児教育学科の学生には役に立ち、その分野でなら私は学生に十分なアドバイスや方向付けをしてやれると思ったからである。

つまり、こどもは全身を使ってよく遊ぶ（運動する）。全身で運動するには足で自分を支えるので足の発育発達や異常、それらと関連ある因子を調べるといふ研究は幼児教育学科の学生には非常に有意義な研究だと思つたのである。

同時に私は、学生の研究発表の手助けをするだけではなく、学生にやらせる研究をもつと深めて、自分自身も学会で発表する論文を書くことと思つた。私には、毎年論文を一本以上は書かなければならないという義務は課されていないし、論文を書かなければ降格させられるということもない。しかし私は、何もしないで「私は大学の教授でございます」と名乗るのはイヤだった。だから私は、日本体育学会の発育発達部会の会員になり、毎年その学会で論文を発表することにしたのである。テーマはやはり「幼児の足趾形態の発育発達について」であつた。次に掲げるのは研究開始後七年目の序文である。

はじめに

幼児の足趾形態の経年観察に取り組んで七年目。今年度がその最終年度である。

観察する項目は次の五項目である。

土踏まず面積比の経年変化（できている・できつつある・できていない）

母趾角の経年変化

足背高の経年変化

足幅と踵幅の比率の経年変化

踵骨外反角の経年変化

当初、同一被検児を五年継続して各項目の経年変化を調べるつもりであつたが、転園や転学或いは事情による計測中断などがあり、最終年度の被検児が統計処理をするに十分な数にならないおそれがでてきたので二年目に新たに低年齢の被検児を加えて継続観察を進めた。よつて当初から継続観察をしていた被検児は二年前に終了したが、追加の被検児の観察を続けたので七年かかった。

平成十七年度（研究開始年度）は前記五項目について次の四項目を分析した。

加齢的な有意差は見られるか。

各年齢階層間に有意差は見られるか。

各年齢階層の男女間に有意差は見られるか。

すべての項目について座位と立位間に有意差が見られるか

平成十八年度は平成十七年度に行った座位と立位の比較を研究対象から外し、データは立位のみ値を比較分析することにした。理由は、低年齢児の測定値は体重が軽いのでデータにばらつきがありすぎたことと、データとして採用出来ない事例が多数出現したからである。また、平成十八年度は加齢変化や経年変化の観察だけではなく、幼児の遊び環境について保護者にアンケートを依頼し、こどもの運動量と前記五項目の計測結果の相関関係についても調べた。

平成十九年度は本研究における基準点や基準線についての考え方を明確にしたので、三年分の全データを

再分析し、全データの加齢変化を見た。さらに、幼児の裸足保育群と非裸足保育群の比較検討と成人女性の運動群と非運動群の比較検討を加えた。

平成二〇年度は他県の裸足保育推進幼稚園からデータを得ることができたので再度幼児の裸足保育群と非裸足保育群の比較検討をした。さらに平成二〇年度は成人男性の運動群と非運動群のデータも得ることができたので、運動が足趾形態に及ぼす影響を、男女間左右間等さまざまな角度から比較分析した。その結果、成人の足幅と踵幅の比率は男女とも運動群の方が非運動群に比べて有意に高い。

成人の踵骨外反角は女性においてのみ運動群の方が非運動群に比べて有意に高い。
成人の母趾角は女性においてのみ運動群の方が非運動群に比べて有意に高い。

土踏まず面積比は男性の運動群と非運動群間の左足にのみ有意差が見られた。他の部門で有意差はない。足長に対する足背高の比率は運動群の男女間では有意差なし。非運動群の男女間で左右両足に有意差あり。このことから、本研究では幼児の足趾形態についても、足幅と踵幅の比率・土踏まず面積比・母趾角・踵骨外反角及び足長に対する足背高の比率の五項目には何らかの運動能力との関係が見出されるのではないかと推測を立てて研究に臨んだが、児童の運動能力と足趾形態間には相関関係はなかった。

平成二二年度は全被検者を対象に重心動揺検査を実施した。重心動揺検査はヒトの平衡機能の研究として、主に耳鼻咽喉科領域で進められた事例が多く、迷路（内耳）障害・小脳障害・脳性麻痺・視覚障害・精神遅滞・ダウン症・聴覚障害などの報告がある。本研究は幼児や児童の平衡機能の発達過程を明らかにするとともに、足趾形態の発達過程と幼児や児童の平衡機能の発達過程の関連を明らかにすることを目的とした。

平成二三年度は本研究の最終年度である。これまでは、各年齢群間のデータの有意差や、有意差が外的要因に左右されるか否かなどを調べてきたが、本年度は本来の目的である同一被検児の経年変化を調べた。当初、同一被検児の五年間の経年変化を調べるつもりだったが、五年継続で最後まで計測できた被検児数は統計処理するには足りなかったため、二歳から計測を開始して五歳まで継続した被検児群、三歳から計測を開始して六歳まで継続した被検児群、四歳から計測を開始して七歳まで継続した被検児群の三群に分け、各群の四年間における経年変化を調べることにした。

ということで、幼児の足趾形態の発育発達をテーマに研究を続けてきたがこれが苦難の連続であった。論文というのは経験論だけでは書けない。研究テーマを決めたらその分野における知識は相当深く勉強しなければならぬが、それだけではなくそのテーマに関しての先行研究がどれくらいあるか、またその研究は現在どこまで進んでいるかなどを細かく調べなければならぬ。私はまず、水野祥太郎先生（明治四〇年）昭和五九年 川崎医科大学長）の著書「ヒトの足 この謎にみちたもの」と鈴木良平先生（長崎大学医学部整形外科教授）の著書「足の外科」を購入して読んだ。先行研究も調べられる限り調べた。先行研究は国内だけではなく外国のも調べた。それだけではまだ足りない、寺本司先生（当時長崎大学医学部整形外科 三和中央病院 医療法人渡辺会大洗海岸病院院長）のもとに頻りに通って医学的なことをたくさん勉強した。寺本先生には特にデータの取り方を習った。

例えば踵の骨の傾きを調べるためにカメラで後方から撮影するとしよう。踵の骨の先端中央部から第二趾の先端までを結ぶ線を足軸といい、カメラの方向がこの足軸にまっすぐに向かっている画像でなければ踵の骨の傾きを調べるデータとしてはボツになるのである。このように、論文を書く前に勉強しなければならぬことがたくさんあって、それを勉強するのに何度も潰れそうになった。

でも、もっと大変なことはデータ収集だった。私の研究は人間の生身の身体を計測する研究である。しかも、単年度で終わるのではなく七歳になるまで毎年同じこどもを継続して計測するのだ。一回でさえ身体を計られるはイヤなのにそれを七歳になるまで毎年計るのである。本人はこどもだから「恥ずかしい」とか「イヤだ」という感情はまだ湧かないかもしれないが「え？私のこどもはひょっとして実験材料にされるの？」と思う親は多いはずだ。この種の先行研究では、単年度で各年齢層の比較や男女の比較をした論文はあるが、

一人のこどもの足が成長とともにどう変化するかを追いかけた研究は私が調べたところでは見かけない。先例がないことを初めてやるというのは何をやるにも大変だ。

それでもなんとか二つの保育園と二つの幼稚園の園長先生にご理解を頂き、またその園児の保護者の方々にもこの研究の重要性をご理解いただいて、なんとかデータを取らせて貰うメドがついた。しかし、年次が進むにつれて被検者が少しずつ減る。引越して他の園に転園する園児が出たり、途中で継続計測を断られたりするのだ。そこで私は、研究開始年度から二年遅れてまた新たに一歳児からの継続計測の被検者を前述の二つの保育園にお願いし、計測を継続させてもらうことにした。そうしないと最終的に論文として成立するデータ数が確保できない可能性があったのだ。

被検者が小学校に入学してからが大変。七歳という年齢は、おおむね小学校一年生までだが、早生まれの子は二年生時にも測定しなければならぬ場合がある。何より大変なのは、保育園や幼稚園では一度に数十人の園児を計測していたが、その子たちが小学校に入学すると数が分散する。幼稚園や保育園で計測した被検児の一〇人以上が同じ小学校に進む場合もあるが、ある学校には一人しか行かないという学校もある。また、一度計測したことがある学校は、次年度に園児が新たに入学した場合でも「また今年もお願いしま〜す」といつて計測させて貰えるが、公立の小学校ではなく私立の小学校に進級する園児もいる。そんな時はまた最初から経緯を説明して協力依頼をしなければならない。

計測をさせて貰う時間がまた大変だ。幼稚園や保育園は朝の始業前、小学校は給食後の昼休みを利用した五時間目の授業が始まる前しか時間がとれない。それを七年間続けなければならぬのである。欠席者一人のために日を改めてまた出直すことや、転園した子の転園先にお願いくることや、私立の小学校に一人だけ進学したのを「一人ぐらいならいいや」と言っつてめんどくさがつたりしていると論文として扱うデータ数が足りなくなつてしまうのである。データ集めは本当に大変だった。

足型を計測する器具も自分で作った。この器具は東京工業大学の平澤彌一郎教授が考案したものが、今では改良されて市販されている。それは、ガラス板の上に被検者を立たせて足の裏をカメラで撮影し、その画像をパソコンに取り込む器具だが、私の研究は足裏だけでなく足の甲の高さや踵の骨の傾きも調べるのである。そのような撮影が可能になるよう改良したものを自分で作った。ホームセンターやガラス屋に出かけていて材料を自分で買って来た。これも大変だった。設計図を引き、材料を買ってきて作つてみたら寸法を間違つていて役に立たなかつたり、途中で壊れたり、三作目にしてやっと計測可能な器具ができあがつた。

しかし、大変なことはまだまだ続く。次に大変なのは集めたデータの処理だ。カメラに収めた画像を持ち帰ってパソコンに取り込む。一人五枚(足底・右から・左から・後方から・前方から)の写真を撮るのだが、パソコンに取り込むと、シャッターを切った瞬間にその子がちょっと動いたのでピントがずれてしまった。足の画像が見つかったり、撮つたつもりの方の画像が抜けていたりすることがある。そうするともう一度その子の右足だけとか踵だけを撮影するために出かけなければならない。現場で充分注意はしているが、数十人のこどもたちを時間内に次々と撮影しなければならないのでこんなことが起きてしまうのだ。

ここまでのことはしかし、大変といつても労力を惜しまず根気強く取り組み解決可能な大変さである。でもこれらのデータを論文として発表できるようにするには根気や労力だけでは済まない。例えば五歳児百人の男女の土踏まずを計測したとしよう。男の子の数値合計を百で割つたら三〇で女の子の数値合計を百で割つたら二五だつたとする。そこで、男の子と女の子は平均で五の差がありますよ、と言つてもそれは論文にはならない。五という数字を差があるとするか差とは言えないと言つかは統計学的な処理をしなければならぬのである。もっとも分かり易いのがt検定。それで処理をすると統計学的な有意差が大いにあると言えるなら「**」、あると言えないなら「*」、あるとは言えないなら「+」という記号が付いて表示される。t検定で処理をすると先ほどの男女の平均の差が一〇であつても「+」だつたり二であつても「**」だつたりすることがあるのだ。

論文を書くにはこのように統計学の知識がなければならない。それは大学時代に勉強したはずだが六〇歳

を過ぎるまで論文など書いたことのない私がそんな学問を覚えているわけがない。何が大変だったかといつてこの統計学をもう一度勉強し直すのがもつとも大変だった。まさに六〇の手習いである。毎晩深夜まで統計学の勉強をする。それをもとにデータ処理をする。しかし悲しいかなやはり六〇の手習い。データ処理をしたあと他の作業をしていて二日後にまたデータ処理の続きをやるうとする、「あれ？俺はこの結果をどうやって算出したんだっけ？」となる。

データ処理をしたらよいよい論文を書く。これがまためんどうかい。句読点や文字の種類はもちろん、図や表を挿入する場合には図の表題は図の下に書かなければならないとか、表の表題は表の上に書かなければならないとか、参考文献の表示はこうしななければならないとか、細かい書式がうるさいのである。内容は良くて書式が我流ではボツになるのだ。

それを学会で発表するために申し込む。するとまず予稿を送れと言ってくる。予稿とは、どんな論文を発表するのかということをも四〇〇文字で簡単にまとめたものだが、これがまた一文字でもオーバーすると受け付けて貰えない。それが受け付けられ、審査に通って「発表していいですよ」という回答を貰ってようやく学会発表となるのである。

学会で初めて発表をしたのは平成十七年の九月。筑波大学で開催された体育学会だった。発表前夜、私は深夜三時頃までホテルの部屋でパワーポイントを操作しながら翌日の発表の予習をした。論文の口答発表は十五分と決められていて、その時間内に話しきってしまわなければならない。チンを二回ならされてから話し続けてはならないし、早く終わるすぎてもダメなのだ。深夜の予習はストップウォッチで時間を計りながら何度も発表原稿に加筆修正を加えていく。これを毎年繰り返すのである。本当に苦しかった。

余談がある。学会発表では最後に必ず質疑応答の時間がある。筑波大学での発表の時私は質問をされた。「外反母趾について、何を根拠に十五度という角度を基準とされたのですか」という質問だった。それは質問というより攻撃だった。私は「世界における整形外科学会の基準です」と答えた。するとその人は質問を変えて今度は計測方法のことについて突っ込んできた。明らかにその人は、私とその質問に答えられずにいるおろする姿を聴衆の前に晒させようとしているようだった。ほかにもある。私は学会というところは研究者が学問を深め合う神聖な場だと思っていたが、つまらない派閥意識を思わせる言動や親分子分関係を感じた場面がいくつもあった。ちよつとがっかりした。

五 F I B A A S I A 女子選手権大会

【経緯】

平成二二年。大村市協会からこの話は持ち上がった。大村市協会はそれまでに、JBLやWJBLの試合や全日本男子チームの合宿やキリンカップなど、何回もビッグイベントを開催している。大村市で開催されるビッグイベントは、大村市協会だけではなく大村市の活性化のために、大村市をバスケットの街大村と印象付けたいという意図で市当局がまた強い思いを持ってこれを支援している。

当時、県協会の理事長をしていた私は大村市協会広報部長のN氏からFIBAAASIA女子選手権大会誘致の相談を持ちかけられた。それまでのイベントは県協会が誘致して主管を大村市協会がするというかたちを取り、県協会の印鑑は要るがそれは建前だけで中身はすべて大村市協会が仕切って実施して何も問題はなかった。しかしこのFIBAAASIA大会をやりたいたいとN氏が日本協会へ打診したところ「山崎先生はなんと言ってるんですか？」と言われたのである。大村市協会だけではなく「県協会も本気なのですか？」という意味だ。

キリンカップは確かに国際試合だが国際のあとに親善が付く。FIBAAASIA女子選手権大会はロンドンオリンピックの予選で、国際親善試合ではなく国際大会なのだ。日本協会としては一地方協会が手を挙げたからと言って、はいどうぞというわけにはいかないのである。その誘致活動の経緯から話そう。

平成二十一年一月十八日

日本協会からFIBAA S I A男子バスケットボール選手権大会東アジアサブゾーン大会を、平成二十一年六月下旬に日本で開催するが、開催地として立候補する県がありますか、という通知あり（別添資料）。平成二十一年一月十九日

県協会はこのことを県内各地区協会に通知する。直ちに大村市協会から「興味有り」の連絡あり。その旨日本協会に連絡する。日本協会からは、東アジアサブゾーン選手権大会は国際大会ではあるがゲームレベルはキリンカップよりかなり低い。大村市協会は平成十七年にキリンカップ（全日本男子対オーストラリア）を実施しているので、東アジアサブゾーン選手権大会では地元の人たちは満足しないのではないかと回答があった。それでは可能性があるのは他にないかと質問をする。日本協会は平成二三年のFIBAA S I A女子選手権大会の日本開催誘致を知らせてくれた。

平成二十一年三月十二日

県協会はFIBAA S I A女子選手権大会開催誘致にかかわる資料を日本協会に請求。

平成二十一年一〇月二三日

日本協会から送付されてきた資料を検討し、誘致に動くことを決定。

平成二十一年十一月九日

県知事及び大村市長に、県協会会長と大村市協会会長連名で要望書を提出。

平成二十一年十一月三〇日

日本協会より現地視察（試合会場・宿舍・移動手段等）。視察の結果報告は次の通り。

コミュニケーションセンターを含めたシーハット大村は、国際大会会場として不合格にはならない。

宿舍は、インターナショナルホテルは最適だが、十二チームの選手団をすべて引き受けるには部屋数が足りない。したがって、インターナショナルホテルは、各国スタッフや審判員など役員の宿舍とし、選手は別宿舍がよい。

大村市で選手宿舍として条件に合うのは、大村マリーナホテル・チサンイン大村長崎空港・大村セントラルホテル等だが、諫早・長崎方面では交通の便も含めて、ホテルニュー長崎・長崎全日空ホテルグラバーヒルズ・ベストウエスタンプレミアホテル・リッチモンドホテル長崎思案橋等が条件に合う。

長崎に選手宿舍をとれば、高速道路を通って約三五分で会場に着くが、市内走行を滞りなく行うために、バスチャーターやパトカー先導などの依頼をしなければならぬかもしれない。

平成二十一年十二月六日

大村市長からゴーサインが出る。

平成二十一年一月二三日

日本協会から委任されたスポーツスマーケティングプランナー&イベントプランナーであるK氏と大村市・シーハット・県協会の関係者が詳細な打ち合わせを実施する。

平成二十一年一月二四日～二五日

二日間、大村市役所大会議室で『平成二三年FIBAA S I A女子バスケットボール選手権大会の長崎誘致に関する学習会』を行った。出席者は大村市職員数人・大村市協会役員数人・シーハット大村職員一名・県協会役員数人。

以下、山崎純男のホームページより。

一日約八時間の学習会でした。とても疲れました。この大会はロンドンオリンピックの予選です。アテネオリンピックはアジア枠三でしたがロンドンオリンピックはアジア枠一です。アジアで優勝しなければロンドンオリンピックには出場できません。日本協会がゴタゴタしていようが、スタッフが誰であろうが、なんとでも日本代表チームをロンドンに送り込まなければなりません。だからこの予選を長崎に引っ張って来ようと思えました。もちろん、これを機に長崎国体に向けての県協会及び各地区協会の組織力を向上さ

せるというのも狙いのひとつです。誘致にあたり、バスケット関係者の中にも「大賛成だ」「できるわけないだろ」と賛否両論様々な意見があります。それもこれもすべてひっくるめて受け入れ、前へ進まなければなりません。

私の生活の中での最優先事項は自チームの強化です。正直言ってそれ以外はすべて重荷です。ですが、頼って来られたり困っている人から相談を受けたりして、私が動けばなんとかなのであれば断りません。そんなこんなで、「動いた以上責任を取らなければ…」という仕事が雪だるま式に増えてきて、身動きとれなくなってきた今日この頃です

さあ、船はもう岸壁を離れた。途中嵐に見舞われようが何が起ころうが止まるわけにはいかない。動き出すに当たり、まず県協会会長・大村市協会会長の連名で大村市長あてに要望書を提出した。平成二二年三月一〇日付けである。内容は左記の通り。

本協会は、これまで全日本チームの合宿誘致やキリンカップ等国際大会の誘致さらにWリーグの毎年開催など継続的に大村市体育文化センター（シーハット大村）を主会場として実施してまいりました。また、大村市におかれては「バスケットボールの街大村」を目指し、WJBLトップチームのJOMOサンフラワーズのスポーツ合宿を県とも連携して誘致するなど、スポーツによる街づくりに取り組んでおられます。こうしたこれまでの活動や実績を踏まえ、また、平成二六年「長崎がんばらば国体」の開催も視野に入れて、標記大会を下記要領で長崎県（大村市）に誘致したいと考えております。

本大会の開催により、世界的レベルのプレーを間近に観ることによる競技意識の高揚や感動を呼び起こすとともに、長崎県の国際化や国内外に長崎県の魅力を発信する絶好の機会となります。また、国内外からの多くの観戦者による経済波及効果や地域のにぎわい創出や活性化にも繋がるものと確信しております。

つきましては、本大会の誘致及び開催に向けて、当協会も万全を期すよう努めてまいります。当協会組織だけでは運営基盤が脆弱な面もありますので、開催の趣旨をご理解の上、特段のご高配並びにご支援を賜りますようお願い申し上げます。

記

- 一 事業名 第二四回 F I B A A S I A 女子バスケットボール選手権大会（ロンドンオリンピック予選）
- 二 期 日 平成二三年六月中旬以降約九日間
- 三 会 場 大村市体育文化センター（シーハット大村）
- 四 規 模

参加国 レベルグループ六ヶ国（日本・中国・韓国・チャイニーズタイペイ・インド・レバノン）
レベル二グループ六ヶ国（マレーシア・カザフスタン・ウズベキスタン・スリランカ・インド
ネシア・シンガポール）

参加者 二四〇人

観戦者 延べ二万一千人（内県外一万人）

宿 泊 大村市内及び長崎市内のホテル数ヶ所

経 費 二億四千万円

放 映 テレビ中継はCS放送の「Jスポーツ」にて、世界三〇数ヶ国に生放送及び録画放送予定

五 要望事項

大会開催に関する支援について

実行委員会へ、長崎県・大村市・長崎市の参画を要望する。

・実行委員会組織案バスケットボール協会（日本・長崎県・大村市・長崎市）、大村市、長崎県、コンベンション協会（長崎県・大村市）

予算的助成を要望する。助成要望額は開催検討委員会にて試算する。

- ・地元準備予算として、半額（一億二千万円）をめどに検討を考えている。
- ・残りは日本協会、国際連盟へ支援をお願いする。
- ・助成額は長崎県と大村市から不足額の一部助成を要望する。ただし、会場費などは定価で試算しているので、減免での支援を頂くと実質助成金は減額できる。
- ・チケット収入予定三千万円。スポンサーなど一千万円。今後、スポンサー活動を視野に考えたい。内容は、寄付・ふるさと物品などのネットワーク販売。

実際に誘致するととなると、開催に向けてだけではなく、開催後も含めてクリアしなければならないことがたくさんある。それを左記に列記する。

【ハゴツプ視察】

F I B A A S I A 選手権大会はアジア連盟の主催である。アジア連盟は、F I B A（国際バスケットボール連盟）本拠地はスイスのジュネーブ）の傘下で、アジア・アメリカ・アフリカ・ヨーロッパ・オセアニアの五つに分けられた支部のひとつである。アジア連盟の本拠地はマレーシアのクアラルンプールにあるが、アジア連盟の大会を仕切っているのはレバノン人のハゴツプ・カジリアン氏である。

ハゴツプ氏は、アジア連盟の会長でも理事長でもなく、アジア連盟第一事務総長補という肩書きだが、アジア連盟主催の行事はこの人がうんと言わないと先に進まない。といえば、権力を傘に威張っているように聞こえるがそうではなく、思いやりがあり、大会に参加した選手や開催地の幸せを最優先に考えた言動をする人である。

大村開催に至るまでの経緯を話そう。まず日本開催となった経緯から。

日本はアジア連盟に対して開催の意思表示をしたが同時に中国と韓国も手を挙げた。それをアジア連盟は「日本で実施する」と決めた。その決定に大きな影響力を持つのがハゴツプ氏なのだが、ハゴツプ氏がなぜ「日本で実施する」と決めたかという点、実は平成二一年の女子F I B A A S I A 選手権大会は台湾で行われる予定だったが、台湾がスポンサーとのトラブルでドタキャンしたので急遽インドで開催されることになったし、翌年レバノンで開催されたF I B A A S I A スタンコビツチカップ大会の運営がとんでもなくルーズで、選手が宿舎から会場までバスで移動するのに二時間もかかったとか、アジア連盟主催の大会で二年続けてトラブルが起きているので、ハゴツプ氏は運営においては絶大な信頼がある日本でやって貰いたかったのである。

ではなぜ、日本の中で大村開催となったのか。実は長崎開催の意思表示より少し遅れて仙台が手を挙げた。日本ではこの二ヶ所が手を挙げたのでどちらかで開催することになる。我々は仙台が手を挙げたと聞いた時に「負けた」と思った。仙台市の人口は一〇三万人。大村市の人口は九万二千人である。とても太刀打ちできない。ところが最終的な結論は長崎で開催となった。このことをあとで日本協会のH氏に私は尋ねた。

山崎「仙台には絶対勝てないと思っていただけどうして長崎開催になったの？」
H氏「熱意ですよ。それと行政の積極性です」

他にも事情があったのかもしれないが、H氏によればアジア連盟の日本に対する信頼、日本協会の長崎に対する信頼でこの大会の開催が決まったということだ。

さて、前置きが長くなったがハゴツプ氏の視察のことについて話そう。

平成二二年十一月四日付け、山崎純男のホームページより

三一日昼過ぎから三日の夕方五時までずっと大村で会議だったことはお話ししましたが、その間の大きなイベントはF I B A A S I A 女子選手権組織委員会総会でした。それは新聞等で報道されたのでご存知の方も多いと思いますが、ああして報道される華やかさの裏では大変な作業が続きました。もっとも大変だったのはハゴツプ氏の視察と、それに基づくミーティングでした。

彼はFIBAのアジア地区最高責任者ですから綿密な下調べをしてアジア大会が円滑に行われるよう我々に改善の要求をします。彼の改善要求の根拠は充分理解することができましたので、彼が空港を発ったあと、日本協会のスタッフとギリギリまで打合せをし、夕方六時頃短大に戻ってきました。課題は山積みです。これからハゴツプ氏の要求を長崎大村のスタッフに理解させ、予算をふくらませずにハゴツプ氏の要求にどれだけ近付けるかという作業が続きます。

視察の時のハゴツプ氏の要求はとても厳しかった。

試合会場のコートは問題ないが観客席が少なすぎる。だから仮設スタンドを取り付けて観客席を増やせ。選手の更衣室が足りない。同時に四チームが更衣してもいいように、外付けであと二つ増やせ。

大村市内で宿泊施設として使えるのはインターナショナルホテルしかない。そこはレベル二の六チーム用と審判本部として、役員本部は長崎市のホテルニュー長崎、レベル一の六チームの宿舎は長崎全日空ホテルグラバーヒルズにしる。

但し、長崎から大村会場までは高速道路を使っても三五分かかる。FIBAの国際大会基準では宿舎から会場までの所要時間は二五分以内となっているので、次回視察までにこの問題をクリアしておけ。

練習会場の大村高校と自衛隊の体育館は冷房の設備がないので外付けの冷房装置を取り付けろ。

などなど、「そこまで言うか」というような注文が多かったが、それはハゴツプ氏が無理難題を押しつけているのではなく、どこの国で開催するにしてもこれが国際大会基準だぞとすることを確かめただけであって、それを我々が知らなかっただけである。

知らなかっただけであると言ったが、実は我々は日本協会から事前に国際大会マニュアルを買っていた。厚さ二センチもあるマニュアルで、そこにハゴツプ氏が言ったようなことはすべて書いてあるのだが、我々に厚さ二センチもあるマニュアルを読破する根性はなく、またハゴツプ氏が言う文言は確かにマニュアルの中にあつたということ、ハゴツプ氏から言われて思い出しはするのだが、なにしろ国際大会を運営するのは初めての経験なので、マニュアルに目を通した時にその文言が目に入ってもそれがどういふことなのかイメージできなかつたのである。

あとでわかつたことだが、日本協会のH氏たちはこのことをすべて知っていた。ホテルが条件を満たしていないとか、宿舎から会場までの所要時間が条件を満たしていないとか、練習会場にも冷房が要するなどすべて知っていて、ハゴツプ氏には「わかつた、なんとかする」と言い続け、結局最後に「ごめん、練習会場の冷房と所要時間のこととはどうにもならなかつた」と言うのだ。で、ハゴツプ氏はというと、にこつと笑っておしまいなのである。

ハゴツプ氏も、所要時間が三五分というのは許容範囲内。日本は宿舎から会場まで二時間もかかるというようなどんでもない運営をする国ではない、練習会場に外付け冷房を入れるのはとても安く金がかかるので無理強いはいしない。そして日本は、もし暑ければ業務用扇風機を会場に持ち込んだりして何とかしようとする国だということを知っているのだ。日本協会も「なーに、そこまでしなくてもいいんだよ」と安易な対処をするのではなく、ハゴツプ氏の言うことに対しては精一杯の努力をしてのごめんなさいなので、ハゴツプ氏も長年のつきあいでそこらへんがわかつていて、日本のごめんなさいに対してはにこつと笑っておしまいにしてくれたのである。

続いて平成二二年十一月二三日付けの山崎純男のホームページより

昨日は、FIBAASIA女子選手権大会のことについて、協会スタッフとイベント会社の話し合いがありました。そして引き続き私の研究室に場所を変えて協会スタッフだけでミーティングをしました。FIBAASIA女子選手権大会は、長崎県・大村市・長崎市の行政側と、日本バスケットボール協会・長崎県バスケットボール協会の現場側の五者協同で動いています。当初はみんな張り切っていました。

しかし事が進んでくると互いの思惑や駆け引きが絡み合っただけでなかなか思い通りにいかず、それぞれから不

平や不満や不安が少しずつ出てきはじめました。これがさらに進むと、「おまえがそう言っただろ」「俺はそんな約束した覚えはないよ」とか、「だから俺が最初から言ってるだろ」「ここまで来て今更なんだよその態度は」と、うまくいかない原因のなすりあいエスカレートしていきます。

これは、今回のような行政を巻き込んだ大きなイベントだからではなく、人が集まって何かをやるうとすれば必ず起こることです。そんな時にもっとも大切なのは具体的に動くことです。額を寄せ合って話し合いをしても、ファックスや電話やメールで連絡し合っても前には進みません。何かが起きたら現場にすぐ行くか、その人に会いにすぐ行くか、とにかく足で動くことです。坂本竜馬がすごかったのはそこです。今、長崎県バスケットボール協会に竜馬が欲しいです。「よし、その役俺が買って出よう」という人は手を挙げてください。竜馬が二人いても三人いてもかまいません。私は竜馬を動かした勝海舟の役をやりますから

さらに続けて平成二十二年十二月三日付けの山崎純男のホームページより

今日は日本協会からH氏とK氏が来てシーハットを視察し、それから場所を長崎女子短大に移して各部署の担当者にレクチャー。今日言われたことの三分の二は、十一月に八ゴツプ氏が来た時に受けたレクチャーの内容と同じ。にもかかわらず仕事が進んでいない。私がみんなをびしびし鍛えていればもつと先まで仕事は進んでいるだろうし、H氏とK氏の来崎は不要だったはず。それを思うと情けなくて申し訳なくて、自分の指導力のなさを痛感して気分がブルーです。フーッ

【行政】

行政と一緒に仕事するのは難しい。お金の話からしよう。大村市・長崎県・長崎市に対して我々は助成金を出してくれるようお願いした。結果的に大村市と長崎県は助成金を出してくれたが長崎市から助成金は出なかった。まずその話からしよう。FIBASIA大会の主会場は大村市だが、レベルの選手たちと役員は長崎市のホテルに泊まるので、それに伴って県外や海外から人が集まり長崎市にお金が落ちる。この「FIBASIA大会は長崎市にも経済効果をもたらしますよ」というのを大義名分にして我々は長崎市にも助成金を出してくれるように頼んだがけんもほろろに断られた。断られた理由が「県内で大きなホテルが多いところは長崎市内なので、県内で大きなイベントが開催される場合は、それがどの郡市で開催されようが泊まり客の大半は結局長崎市内のホテルに泊まるんです。ですから宿泊客が多いことを理由に助成金を出してくれと言われても、それに一々応じることはできません」である。もつともだ。

主会場のある大村市は当初から 円の助成金を出すと聞いていた。そのことを聞いて我々も日本協会もFIBASIA大会の大村誘致に動き出したのである。県も助成金を出すと聞いた。しかし、どんなに大きなイベントでも 円以上のお金を出した前例がないという。これで揉めた。大村市は、県も大村市と同等の 円の助成金を出せという。県は前例がないという。我々はこの間に入って調整と交渉に飛び回った。結果的に、県の「前例なし」は崩すことができなかったが、県は別の方策で大村市と同等の 円相当になるような支援をしてくれることになった。

行政を巻き込む事業は、市長や知事がOKと言ったらそれで済むのではなく議会がうんと言わなければどうにもならない。特にお金がかかることになれば議会在うんというような理由をちゃんと用意して申請しなければ前に進まないことをFIBASIA大会の誘致で学んだ。

また、行政と一緒に取り組む事業は彼等のプライドを大切にしていやらなければならぬことも知った。例えば、試合観戦に来賓として迎えるのも、大会開催に伴うイベントも、県・長崎市・大村市のバランスを考へ、挨拶や万歳三唱や乾杯の音頭等の割り振りも、それぞれの面子を潰さないように配慮しなければならぬのでとても神経を使う。それは、助成金の多い少ないに関係なく気配りしなければならぬ大切なことなのである。

【役員補助員】

大会の準備期間から開催期間中も含めて延べ三千人以上の役員補助員を動員しなければならない。これはバスケットボール協会の役員だけではとても賄えず、ボランティアにも手伝ってもらわなければならない。もっとも手こずったのが重要ポストで働いて貰う先生たちの動員だった。

協会の役員たちは学校の教員が多いので、その学校長に派遣依頼を出す。すると学校長からは管轄の教育委員会から指示を貰わなければならないという。管轄の教育委員会にお願いをしたら県教委から指示がなければ動けないという。県教委に行けばまず名簿を出せという。その名簿作りが大変なのである。個人個人にまず協力をお願いして名簿を作らなければならないが、個人折衝をすると、協力できるという人、大会準備の手伝いは出来るが大会期間中は事情によって動けないという人、現段階では動けるか動けないか返事ができないという人など様々で、役職をきっちり決めて人員を確保して名簿を作るといのがなかなかできないのである。

そこで、現段階ではまだ返事ができないという人も含めて名簿を作成して県教委に出す。すると県教委からはそんなに多くの教師を同時期に職専免(職務専念義務免除)で出すことはできない。もっと絞れと言っ。それを各個人にまたお願いしても、現段階では返事をできないという人はやっぱり返事をできないわけで、それなら現段階ではつきり返事をできる人だけの名簿を作ろうと思っても、それだと現実にFIBASIA A大会を動かせる人数に満たないのである。まったく前に進まないまま時間が過ぎ、職専免さえ出してもらえば動けると言っている人からも、日本協会からも、県教委からも、大村市からも、バスケット協会からもまだかまだかと言われる四面楚歌状態が続いた。

これには、あつという間に解決という方策はなく、役員補助員を個別に当たり、ジグゾーパズルのように一つひとつ隙間を埋めて行く作業しかなく、それに約一年もかかってしまった。ともかく、延べ三千人もの人を動かす事業というのは何をすることも膨大な労力を要する。

【運営組織作り】

FIBASIA A大会を長崎に引つ張ってきた時私は県協会の理事長だった。その後、平成二十二年三月末にこの職を辞し、私は副会長になった。替わって理事長になったのがY氏だった。私は退任して無役になるつもりだったが副会長をさせられた。私はこのFIBASIA A大会を新理事長をアタマにした組織で乗り切らせ、その組織の運営力で四年後の長崎国体を成功させようと思っていた。

私は、県の競技力向上対策本部委員を平成八年から十四年間も続けている。その会議の中で毎回出てくるのが「長崎国体を成功させよう」ということばである。「成功させよう」の意味は二つある。一つは各種目の入賞数を増やして天皇杯を勝ち取ること。もう一つは、国体というイベントの運営をつまくやることである。つまくやるというのは国体を滞りなく済ませるというのではなく、スポーツの普及発展により県民に活力を与え、地域の活性化を図るなど、国体開催に伴う諸々のことをつまくやるという意味である。天皇杯得点の獲得は、極端に言えば一人でもできる。熱心な指導者が優秀な選手を獲得して鍛えればよい。ところが、国体というイベントを成功させるのは一人ではできない。バスケットボール協会という組織がうまく機能しなければ運営できないのである。私はFIBASIA A大会の運営を通してバスケットボール協会の組織力を向上させようとした。

私は理事長を退任してY氏にFIBASIA A大会をまるまる押しつけて引き下がるつもりだったのではなく、理事長職を引いたあともY氏をアタマにした新組織作りの推進には尽力しようと思っていた。ところがY氏は、翌年の教職員人事異動で県教委に行くことになったのである。県教委に行けば協会の役職はおろか、FIBASIA A大会の運営本部長をさせるなどともない。私はまた実働部隊の前線基地に戻らなければならなくなった。

それはそれでいい。これはもともと私が先頭に立って引つ張ってきたイベントなのだから。しかし、仕事

を進めていくうちに組織を再編成しなければ機能しないことに気付き、その再構築に少し時間がかかった。まず幹部の入れ替えを行った。大村市で開催される大会なのに会場委員長は西海市から大村湾を半周して打合せに来なければならぬN先生だったので、大村市職員のK氏に替わって貰った。総務部長だったS氏と競技部長だったO氏をそれぞれ運営副本部長に引き上げた。O氏はY氏のとを受け継いで新理事長になったので、FIBASIA大会の運営ノウハウをそのまま長崎国体の運営に結びつけ、長崎県バスケットボール協会を引張っていつて貰わなければならない。だからFIBASIA大会の役職は私のすぐ下に置いた。

S氏を引き上げたあとの総務部長には会場委員長だったN先生を持ってきて、O氏を引き上げたあとの競技部長には県教委から現場に戻ってきたF氏を充てた。各委員会の委員長及び委員も変えた。変えた基準は、県協会や市協会の役職にこだわらず、この仕事は大村市の人がやった方がよいとか、この仕事は長崎市の人がやった方がよいなど、実際に動く場合に動きやすい組織に変えた。この場合も、県や大村市の交渉と同様、勤務先の上司の理解があるかとか、この仕事はこの人に向いているかとか、同じ委員会内での人間関係はうまくいくかなど、細かいことに気を配りながら再構築した。そうしなければ、人は居るけど動かないという組織になってしまう。

【会場確保】

FIBASIA大会の試合会場はシーハット大村と決まった。その他、練習会場は、県立総合体育館・長崎市民会館・自衛隊体育館・大村高校体育館、宿舎は、大村市のインターナショナルホテル・長崎全日空ホテルグラバーヒルズ・ホテルニュー長崎と、一応決まってはいるがハゴツプ氏の視察によって今後どう変わるかわからないので、もしものことを考えて宿舎はあと五つほど当たっていた。それぞれのホテルに視察に行き、許容人数や一度に大勢食事が出来る大広間あるかなど調べて廻った。

一つの例を話そう。インターナショナルホテルにはレベル二の選手たちと審判団を止めなければならないことはすでに決まっていた。しかしやっかいな問題があった。これだけの人数を泊めるには全館貸し切りにしてもらわなければならない。ところがインターナショナルホテルには長崎空港に到着してその日非番になったエアラインクルーが宿泊するために常時数部屋を年間契約で確保しており、全館貸し切りにしてもらうためにはそのクルーにFIBASIA大会の期間中他のホテルに宿泊して貰うよう交渉しなければならぬ。こんな交渉が次から次と起こるのだ。

もつと大変だったのが開催期日がなかなか決まらなかったことである。シーハット大村でやるということには決まった。こちらの希望は八月下旬である。ところがハゴツプ氏は第二案第三案も用意しておけという。我々は、第二案を八月下旬、第三案を六月下旬として用意した。期日決定にあたって重要なことは、その期間にバスケットボールのローカルイベントがあるかないかである。八月下旬はなかった。

八月下旬はインターハイと重なるが、インターハイに出るチームは男女一チームずつだ。一チームだけなら、観客動員も役員数も最小限の被害で済む。六月下旬はローカルバスケットボールイベントはないが、夏休みではないウィークデーに運営しなければならぬので職専免で出して貰う役員の交渉が非常に難しくなるから、これは第三案として用意したけど事実上実施不可能な案だった。

当初我々は、日本が一番早く手を挙げ、八月下旬にやるぞと意志表示をしているのにどうしてそれがすんなり受け入れられないのかわからなかった。あとでわかったことだが残りの四つ、アフリカ・アメリカ・ヨーロッパ・オセアニア地区の予選開催時期がいつなのかということをFIBASIAは様子を伺っていたのである。

こういうのは力関係だ。もしアメリカ大陸予選を八月下旬にやると言われれば、アジア地区予選は別の時期を探さなければならぬ。アメリカ大陸代表はオリンピックで毎回上位進出するし、アジア地区代表は予選ラウンドで姿を消すことが多い。先に手を挙げたことなんか力関係の前には何の役にも立たないのだ。八

ゴツプ氏はその様子を探りながら日本に対しては「待て」と言っていたのである。

力関係と言ったが、ハゴツプ氏は他の地域の様子を見ながら、アメリカ大陸地区が八月下旬にやりそうな気配だったらたぶん「そこは日本が手を挙げているからアメリカ大陸は九月に回してくれ。君たちだったらできるだろう」というような交渉をしたか、または交渉する用意していたはずである。これは私の推測だがハゴツプ氏はそんな人だと思っている。

というわけで、手を挙げてから開催期日が決定するまでかなりの期間がかかった。そこで辛かったのが体育館や宿泊施設の仮押さえに対するクレーム処理である。体育館にも宿泊施設にも、六月下旬と八月月上旬と八月下旬の一般利用者の申込みは受け付けないで空けておいてくれと頼んである。公共施設の体育館の使用申込みは一年前からというきまりがあるのだけれども国際大会という事情を理解してくれて、FIBAA S I A大会は二年も前に予約を受け付けてくれている。ところが通常の予約受け付け開始である一年前になってもFIBAA S I Aからなかなかゴサインが出ない。体育館には一般利用者や団体利用者から「FIBAA S I A大会の開催期日はまだ決まらないのか」というクレームが殺到する。体育館から電話がかかるたびに我々は「すみません。もうちょっと待ってください」と言うしかなかった。

開催期日決定が遅れただけではなく、開催期日が決まっただけでもいろいろなことがあった。一例を言おう。全日本チームが開催数日前に入って練習したいと言いつ出した。長崎市と大村市で、冷房が入る体育館はシーハットと県立総合体育館を除けば長崎市民会館しかない。シーハットと県立総合体育館はFIBAA S I A大会の公式練習会場としてあるので、そこで日本代表チームのプライベイト練習をさせるわけにはいかない。我々は長崎市民会館に相談に出かけたが、フロアの個人利用を申し込んでいる人に事情を説明して空けて貰うことは不可能ではないが、フロアの下にある文化ホールでプラスバンド隊のリハーサルが行われることになっている。この館の作り自体が問題なのだが、文化ホールで音楽の催しがある場合はフロアでドンドンパンパン音がする競技には貸し出しをしてはならないことになっていると係長から言われた。係長も気の毒そう顔をしていた。

我々は冷房付きの体育館をあきらめて、鶴鳴の体育館にありつたけの業務用扇風機を運び込み、氷屋さんにも氷柱を一〇本頼んで涼しい風を起こしてそこで日本代表チームに練習してもらおうことにした。ところが、氷屋さんに注文した直後に長崎市民会館の係長から「先生、取れました！」と電話がかかってきた。文化ホールを借りていたプラスバンド隊に交渉してくれて全館貸し切りにしてくれたのだ。私は係長の顔が菩薩に見えた。氷柱はもちろんキャンセルだ。

【業者】

このように大きなイベントになると、それに伴う事業や工事規模が大きくなる。大きなものを挙げれば、仮設スタンドの設営、外付け更衣室の取り付け工事、外付け冷房施設の取り付け、照度を上げたり回線を増やすための電気工事関係、警備、ケータリングなどたくさんある。我々はこれらに関わる業者はできるだけ地元業者にやらせてあげたかったがそうもいかなかった。各業者にプランを出させて日本協会に提出するが、国際大会に関わったことのない業者の出すプランは日本協会を満足させられず、結局仮設スタンドの設営など、大きな仕事は国際大会を手がけたことのある専門業者を東京から呼ばなければならなかった。

FIBAA S I A大会を誘致するということは、バスケットボール関係者を喜ばせるというだけでなく、それに関わる人々に期待を抱かせる。特に地元業者は「よし、大きな仕事が貰えるぞ」と張り切る。我々も大会開催に関わる職種の業者には足を運び、情報を提供し、プランを出してもらい、それを日本協会に検討してもらってまた出直すということを何度も繰り返した。その結果ボツになると「すみません、おたくには仕事を回せませんでした」と謝りに行かなければならない。それはとても辛い仕事だった。

【寄付金集め】

FIBASIA大会誘致ではこれがもつとも大変な仕事だった。当初我々は寄付金を二十万円集めるつもりだった。入念に計画を立て、使える人脈はありつたけ使い、平成二三年に暦が変わってから我々は動き出した。ところが、想像もしなかったことが起きた。三月十一日、東北地方を襲った大震災だ。寄付金を集めるどころではない。こちらが義捐金を集めなければならぬような未曾有の大震災だった。我々はFIBASIA大会すら開催できるかどうか懸念した。

事実、FIBASIA大会より少し前に開催される予定だったバレーボールの国際試合のFIVBワールドリーグ二〇〇一の日本の全ホームゲーム（平成二三年六月十～十二日開催地未定、六月十八～十九日長崎県立総合体育館、六月二十五～二十六日和歌山ビッグホエール）は中止され、ドイツ、ロシア、ブルガリアにそれぞれ開催地が変更されることになったのである。

しかし、FIBASIA大会は参加を辞退する国が出るわけでもなく、ハゴツプ氏の言動を見ても開催を懸念している様子などまったくなかった。あとでわかったことだが、東日本大震災は長崎から遠い地区で起きたので、長崎にはその影響がないということもFIBASIA関係者及び参加国のチーム関係者はちゃんと知っていたのである。一方、FIVBは、開催地が西日本だけではなく、日本の各地で開催することになっていたので、FIVBの判断で他国開催にしたということだった。

そんなわけで、寄付集めはトーンダウンしてしまい当初予定にはるかに及ばない額しか集められなかったが、ものすごく感動した出来事があった。それは、平成二三年八月四日に県立総合体育館で行われたカナダ代表チーム対日本代表チームとの国際親善試合での出来事だった。

試合が終わって双方の選手たちが退場する際に、会場の隅で東日本大震災の義捐金募金箱を持った係員の女の子たちに近づいて募金箱にお金を入れて更衣室に向かった。すると、それを見ていた観客が我も我もと募金をするために募金箱に集まり、警備員が制止しなければ事故が起こるのではないかと思われるほどの人だかりができたのである。

それは、一日置いて行われた国際親善試合の大村大会でも同じだった。というより、大村大会ではさらに感動する出来事が起きた。大村市には自衛隊が駐屯している。その自衛隊員の方々は震災直後東北に出かけて復旧作業に携わって帰ってきたばかりである。その、自衛隊員の方々が観戦に來られて、しかもロビーには震災の復旧作業の写真が大きなパネルになってズラッと並べられているのである。

日本代表チームの大神雄子選手が、式典の挨拶の中で自衛隊のみなさんに御礼のことばを述べた。おそらく、日本代表チームは自衛隊のみなさんから大きな勇気を貰っただろう。そして、貰った勇気が日本代表チームの活力となり、ロンドンの切符を手にすることができればそれが今度は東北のみなさんに勇気を返すことになる。そんな大会になって欲しいと思った。

【チケット販売】

寄付金集めで思わぬ打撃を受けたので我々はチケット販売でものすごく頑張らなければならなくなった。数年前まで我々は、県内で開催されるバスケットボールイベントのチケット販売は、県下の登録チームに郵送で案内してチケットの注文を取り、当日会場の受付で精算するという方法を取っていた。最近、JBAの登録をパソコンでやるようになったのでTEAMJBAの連絡網を使ってチケットを売るという方法が主体になったが、郵送がインターネットに変わったというだけでその手法は根本的に変わってはいない。

我々は、チケット販売会社があることは知っていたが、そこに依頼すればマージンを取られる。それがいやだった。ところが、国内はおろか海外も含めたチケット販売をこれまでの原始的な方法でやるのは無理だった。だから、最終的には日本協会の指導の下、東京のチケット販売会社と協同でやることになった。

チケット販売については、事前も当日もトラブルが頻発した。観客席はS席A席B席C席など、ランクを決めてその座席数のチケットを用意して販売する。最初のトラブルは、座席数のカウントミスだった。我々は、日本協会から派遣されたイベントプランナーのK氏が作成した会場図をもとにして仕事をやる。その時、

「この範囲の座席は当日持ち込む大きな得点掲示板のうしろになるから座席数としてカウントしてはいけませんよ」と言われたのだが、我々は国際大会の会場作成に関わったことがないのでK氏が作成してくれた座席配置図を見ても実際の会場のイメージが浮かばない。そこで、K氏から言われた「この座席はカウントしてはいけませんよ」がいつのまにかアタマから飛んでしまつて、図面上の座席を一生懸命カウントしてしまつていたのである。しかも、K氏が作成してくれた図面にはカウントしてはいけない座席は色分け表示がしてある。そんなことすら見落とすほど連日連夜の作業で我々のアタマは集中力をなくしていた。

まだある。VIP席だ。FIBAAASIAや日本協会から確保しておけと言われたVIP席は外して座席数をカウントして我々はチケットを販売する。すると大会直前になつてからFIBAAASIAから「FIBAAASIAのVIP席は三〇席しか要らなくなつたよ」と言われたりする。すると戻つてきたVIP席をまた売りに出さなければならぬ。

一般市民の方から事務局に「チケットはもうないの？」と電話がかかつたりする。まだ座席はたくさんあるのだ。また、当日S席のチケットを持つて入場された方がそこは満席で座れなかつたということもあつた。その時は謝つてA席に座席を確保し、許してもらつたが、そんなことは先ほど言つたようにVIP席がキャンセルされて売り席になつたり、逆にスポンサー席を新たに増やさなければならなくなつたりなど、めまぐるしく入れかわる情報が担当者を混乱させ、その情報を事務局とチケット販売会社が共有していなかったことによるものが多い。

しかし、実際に運営本部委員と一緒にFIBAAASIA大会の仕事をしている私としては、自分の本来の仕事を決ませてから夕方事務局に来て、毎日深夜まで作業を続けている担当者に対して「しっかり集中して仕事しろよ」とは言えない。誰もが本当に、精神的にも身体的にも限界を超えて仕事をしていた。

大会に突入した。運営本部には現在のチケットの売れ行き状況の数字がリアルタイムでホワイトボードに書き出される。最終日にそれがだんだん売り上げ目標の数字に近づいてきた。当初の売り上げ目標は三六〇〇万円だつた。担当のM氏の携帯にはひっきりなしに電話がかかってくる。会場入り口のチケット売り場やチケット販売会社からチケットが売れる度に連絡が入るのだ。M氏の携帯がまた鳴つた。ザワザワしていた運営本部がシーンとなる。M氏が「今三枚売れました！」と言つた途端、みんな「バンザイ」と言つて立ち上がった。目標の三六〇〇万円を越えたのだ。最終的には目標を二〇〇万円上回り、三八〇〇万円の売り上げになつた。

【本番】

周到な準備をしてきたにもかかわらず、本番になつてまたいろんなことが起こる。楽しいハプニングから紹介しよう。大会期間を通してレベル二の試合には毎回大村市内の小学生が手作りのカードに応援のメッセージを書き、ひとつのブロックにまとまつてそれを掲げて観戦していた。それは毎回、二つの小学校の生徒が、一つはベンチの向かい側の観客席に陣取り、反対側にもう一つの小学校の生徒が陣取つて、対戦しているAチームとBチームをそれぞれが応援していた。

ここまでは、レベル二の試合の観客席のから空き状態を予測してチケットを大村市が買い上げ、市内の小学校に配つてまとまつて応援をしてくれるよう依頼していたのでハプニングではない。ハプニングはこのあと起こるのである。

これまでのFIBAAASIA大会では、レベル二の試合はどの国で開催しても観客席はガラガラで、レベル二のチームはそういうことには慣れていた。ところが大村市で開催されたFIBAAASIA大会では毎回自分たちを応援してくれる子どもたちがいるのだ。それに感動したレベル二のチームが、自分たちを応援してくれた小学校へ出かけていってお返し交流パフォーマンスをしようと思つた。その日は土砂降りの雨だつたけれどもキャンセルするチームはなく、しかもそれに賛同したレベル一のインドチームまでがわざわざ長崎から大村まで出かけてきてその交流パフォーマンスに参加した。その交流パフォーマンスは、参加国

の選手たちが民族舞踊を踊って見せたり、小学生がソーランを踊って見せたり、みんなで一緒に歌ったり、それはそれはにぎやかだった。これには大村市も観戦に行った小学生たちも大喜びした。

ところが、実は日本協会はこのことを喜んではいなかった。日本協会は、国際大会で何かの間違いが起きてそれが国際問題になってしまふのを非常に心配する。だから、イベントは予定通り滞りなく進めたい。筋書きに書いていない飛び込みパフォーマンスは歓迎しないのだ。

これは大会当日のハプニングではないが、国際問題といえば、まだ参加国が確定しない段階でみんなが気にしたのは北朝鮮が参加するかしないかということだった。北朝鮮の参加については、練習会場を提供している自衛隊はとも気にしていたし、大村警察書も気にしていた。また、大村警察署からは刑事さんがわざわざ事務局に来て、中国チームのスケジュールや宿舎のことについていろいろ質問された。これは、北朝鮮のチームが何かをするとか中国選手団が何かをするというのを警戒したのではなく、国交がうまくいっていないこの両国の選手に対して一般市民がいたずらや嫌がらせをしたら国際問題になるので特別に気を配るのである。

選手団のことも、国際大会ではいろんなことが起こる。試合が始まり、両チームの紹介が行われているのに遅れてコートに來たり、練習割り当ての時間が過ぎてもいつまでもコートを占領しているチームがあったりと、日本ではあり得ないようなことが起こる。やはりお国柄の違いなのだろう。

これはハプニングではないが、私がとても反省していることがある。「レベル二のチームは練習時間を割り当てていても練習なんかやりはしないよ。そんなにピリピリしないでいい」と、会場係の人たちに言っていた。ところが、レベル二のチームは「こも時間通りに来て時間ぎりぎりまで一生懸命するのである。また、レベル二のチームは自分たちの「試合が終わればショッピングか町の散策をして旅行を楽しむさ」と思っていたがそうではなかった。夜の日韓戦になったらそろそろ選手が増えてきて選手席が満杯になり、一部一般観客席に誘導しなければならぬ事態になった。レベル二のチームが全部強いチームの試合を観たいと言って観戦に來たのである。弱いチームは試合に來るといよりも海外旅行を楽しむという感覚の方が強いという見方をしていた自分がとても恥ずかしかった。

ハプニングと言えば、私がいるんな人から頼まれて私がゴーサインを出したハーフタイムショーの龍踊りは日本協会イベントディレクターのH氏を怒らせた。このハーフタイムショーについては筋書きにはない飛び込みなので日本協会のイベントディレクターであるH氏と相談しなければならぬ。ところがその日H氏は所要で午前中シーハットには姿を現さず、携帯電話も繋がらない。そんな状況の中で大会関係者から「どうするんですか」と迫られる。やるならやるで各部署の準備をしなければならぬのだ。時間が無い。私はH氏と相談しないままゴーサインを出した。

結果は誰もが喜んだ。中国対日本のハーフタイムショーでは行われたが、レバノンやカザフスタンの選手たちがフロアに降りてきて龍と一緒に記念撮影するなどしてとても盛り上がった。が、盛り上がったからとか、みんなが喜んだからOKなのではなく、計画にない飛び込みは絶対ダメなのだ。もしそれをやりたければなぜ計画の段階で提案しないのかということだ。計画にないことをやってそこで事故が起きたら取り返しがつかない。

若い頃私は、高校の体育祭で教頭に食ってかかったことがある。何度も会議にかけて審議し実施要項を作って実施した体育祭なのに当日になって教頭が「プログラム進行にゆとりがあるからここで保護者競技を入れれば？」と提案したのである。「そんなの、何度も審議する段階でなぜ言わなかったんですか！思いつきはやめてくださいよ！」と怒鳴りつけた。高校の体育祭ですらそんな剣幕で怒った私が、こんな大きな国際大会で、みんなから迫られたとはいえ筋書きにないイベントをやってしまったのだ。これは今でも悔いが残っている。大失敗だった。

こまかいことだが観客対応がまた大変だった。私は運営本部の自分の座席に座って一日中それぞれの持ち場から入ってくる情報に対処して指令を出さなければならぬ。指令や連絡はすべてトランシーバーだ。

「こちら会場係の　です。中年の男性が観客席で酔いつぶれているんですがどうしましょう？」
「そんなのつまみ出せ！」

というわけにはいかないのである。もしその中年男性が日本人ではなくて、中国から自国の応援に来た中国人だったら、扱い方次第ではトラブルになる。

「こちら受付ですが、IDカードを持っていない方が本部長を呼んでくれと言っておられるんですが」
そう言われ、受付に行ってみると大村市の副市長だった。エスコートして来られたFIBA推進室長のU氏が不機嫌そうだ。すぐ、IDカード用の写真を撮って副市長用のIDカードを作って私が案内した。もちろんVIP席である。なぜこんなことが起きたかという点、事前に副市長が来館される日は調べてあったのだがそれを受付に連絡するのを忘れていたのだ。私が受付に居たのなら副市長の顔はすぐわかるのだが受付の係員は副市長の顔を知らない。それで少しだけ待たせてしまうことになってしまった。

これは国際大会に限らずいつでもどこでも起こることだが、顔パスで入ろうとしたり、IDカードの色によつて、通れる通路や座れる座席が決まっているのだが、それを無視して通ったり座ったりする輩が出てくる。そういう輩に限って、係の高校生がきちんと職務を遂行しようとしたのにその高校生に文句を言ったりする。

「本部長を呼んでくれ。というお客さんが退場口のところにいらっしやるんですが」

と言われてそこへ行ってみると、その人は県外から観戦に来た私の知り合いのバスケット関係者だった。で、用事は何かと聞くと

「一端外出してまた夕方観戦に来るんだけど、大雨なので傘を貸してくれないか」

そんなこんなで会場で試合を観戦する時間などまったく持てない八日間だった。ここまでFIBASIA大会のことについて書いてきたが、試合についての感想は、そんなわけで観ていないので書けない。

六 母

平成二二年六月四日午後十一時三四分。母が永眠した。九二歳と四ヶ月だった。母のことについては初版のチームを創る第一章「一〇鶴鳴」に書いている。ここではその後の母の事について述べたい。初版でも述べているが、母は昭和五二年の春、私が鶴鳴に移籍する際に、県外からの選手の面倒を見るための寮に移り住んでくれた。しかし、年々他の部活動にも通学区域外から入学する選手が増え、学園が短大の敷地内にある短大生用の寮の一階を高校の部活動のための寮にしてくれたため、私個人で卒業生の保護者から借りていた一軒家の寮を閉じた。そのため母は神戸に住んで自営業を営んでいる母の妹の家の手伝いをするために神戸に移り住んだ。

それから六年後の平成七年一月十七日。阪神淡路大震災が起きたのを契機に、年老いた母を実の妹が居るとはいえ遠いところに住まわせておくのは心配だったので長崎に呼び寄せた。呼び寄せたが母は頑固な人で嫁と一緒に住みたくないという。仕方なく私は、鶴鳴の近くにアパートを借りて母と一緒に住むことにした。「山崎先生は離婚したらしいよ」「という噂が全国に広まったのはこの頃である。

母は大正七年二月三日生まれなので、長崎に呼び寄せた時は七七歳。まだまだ元気だった。しかし、引き取ってから二年過ぎた頃から頻りに微熱が出るようになった。症状からして明らかに尿路感染症である。あまりにも頻りにそれが繰り返されるので、主治医の紹介で湍町にある成人病センターに入院して検査してもらった。すると、母は大腸に無数の憩室（けいしつ）＝大腸の壁に出来る横穴で、ここに食べ物の力スが貯まって炎症を起こす）を持っており、そのために大腸が異状に膨らみ、それが膀胱を圧迫して膀胱炎を起こしやすいのだということがわかった。その時、大腸にガンがあることも見つかった。

成人病センターの担当医が手術をするかしないかを話し合っただけで結論を知らせてくれという。話し合っただけで結論をと言われても、そのガンが転移しているのかいないのかわからなければ返事はできないと言ったが、

当時はまだ、転移しているか否かを明確に示せる方法はなく、手術してみなければわからないと言われた。母に「どうする？」と言ったら母が「年寄りだからガンの進行が遅く、このままほっといても寿命が来て死ぬのか、手術しなかったらガンが進行して死ぬのが早くなるのか：競争だもんねえ」と、私が思っていることと同じことを自ら言った。そして母は「やってもらおうかね」と言った。

母は、平成九年一〇月五日（七九歳八ヶ月）。大病院に入院した。手術前に様々な検査を受け、軽い肺気腫があることや心臓の状態が少しよくないことも判明したが手術に踏み切った。

平成九年十一月五日

経仙骨の大腸切除術。尾てい骨を一個取り去り、その穴から器具を入れて大腸の一部とリンパ節を切除する手術だそう。腹を切り裂かないので傷跡がない。転移もなかった。したがって抗ガン剤も服用しない。心配していた人工肛門も付けずに済んだ。

平成一〇年一月七日

退院。正月前には退院の予定であったが微熱がなかなか下がらず、退院が遅れた。

N助教授の意見「この微熱は憩室を持つてゐるからかなあ…？」

平成一〇年三月一〇日

右目の白内障手術を受ける。S眼科。

平成一〇年四月中旬

風邪を引く。熱が出たり治まったりが続く。下旬に良くなる。

平成一〇年四月二九日

健康が回復したので野も半島一周のドライブに出かける。

平成一〇年五月上旬

再び熱が出る。私も本人も風邪だと思つ。

平成一〇年五月十二日

具合が悪そうなのでK内科に行くように勧める。本人は行かないと言つ。

平成一〇年五月十三日

私が帰宅しても起きてこなくていいと言つ。またK内科受診を勧める。本人は行かないと言つ。

平成一〇年五月十四日

食べたくないと言つが、お粥を作つて食べさせる。「病院まで歩くのがおつくうなら俺がクルマで連れて行くよ」と言つと「そこまでして貰わなくていい。自分で行くよ」と言つ。過去二回の入院と検査漬けの日々がかなり不快だったのか、どうしても病院に行きたがらない。

平成一〇年五月十六日

熱が続いていたがどうしても病院に行きたがらないので主治医のK先生に往信を依頼する。K内科医院で点滴など、応急の処置をしたがそれだけでは不十分と判断され、市民病院の救急外来に搬送する。市民病院での血液検査の結果、CRP（炎症反応）一般的な基準値は〇・三以下）が二四と異状に高い値を示す。

血圧は四〇から上がらない。無尿状態が続く。明らかに敗血症の症状である。胆嚢が腫れていることがわかり、胆嚢炎の菌が血管内に侵入し、敗血症を起こしたのであろうと推測。ドレーナージで胆汁を外に出す手術が行われる。しかし、血圧は回復せず無尿状態も続く。夜一〇時。看護師から連絡を受けた担当医が自宅からタクシーで病院に駆けつける。母の容態を診たあと、「明らかに敗血症なのですが、この状態から回復した例は過去にもありません。肉親の方には連絡しておいた方がよいと思います」と言われた。

私は様々な事を考えながらベッド脇に付き添っているだけで何もできない。考えることは、「生きていて欲しい」などという思いではなく、葬儀のこととか、親戚への連絡のこととか現実的なことばかりだった。そうして時間が過ぎていったが深夜一時、尿道に通された管から尿が落ちてきた。しゃがんでそれを観察していると、夜勤の看護師さんが来て、「あ、出ましたねえ。よかったですよ」と言つ。無尿状態十一時間だ

ったが、峠を越えたか？

平成一〇年五月十七日

まだ血圧は不安定。尿は正常。しかし、危機は脱したと判定。

平成一〇年五月十八日

血圧が一〇〇〜七〇位の間で安定し始めた。尿は正常。

平成一〇年五月十九日

腹部エコー検査の結果、胆嚢は小さくなっており、血圧も正常に戻る。

平成一〇年五月二〇日

「お腹がすいた。寿司が食べたい」と言う。健康回復か？

平成一〇年五月二一日

まだお粥ではあるが食事の許可が出る。

平成一〇年五月二三日

夜熱が出る。三九度二分。看護師さんも本人も尿路感染症だと言う。

平成一〇年五月二四日

再び食事禁止。夜七時。血便（赤色ではなく、暗赤色。タール便ではない）。尿路がむず痒い症状は昨日と変わらず。

平成一〇年五月二五日

尿路がむず痒い症状は変わらず。血便が出たことによる気落ちか「だんだん悪くなるみたい」と悲観的になる。「元気があるうちに千恵子（神戸に住んでいる実の妹）に会っておこうかなあ」と言う。「そんな体調が戻ってからでいいよ」と私は言う。

母が「大丈夫かなあ」と言うから「血便のことだって、何か悪いことがあれば俺が医師に呼ばれて説明を受けるさ。それが無いってことは心配ないってことだろ」と私は言う。一応、赤色の血便と暗赤色の血便の違いを母に説明する。

昼間腹部エコー検査を受けたらしい。胆汁ドレーナーの管にもう一本肝臓瘍ドレーナーが通され、その管からは血液が少し流れており、胆汁採集容器と同じ別の容器に少しだけ血液が溜まっていた。胆嚢からの出血か？血便の原因が潰瘍か何かかと思っていたのがそうではないらしい。やはり胆嚢に原因があるようだ。少し安心する。

平成一〇年五月二六日

熱も下がり、尿路のむずかゆさもなくなり、安定している。ただ、ベッドの上で常時心電図検査を受けられるよう電極を張り付けられていた。気分はよく、また「早く寿司が食べたい」と言い出す。

夜に顔を出すと輸血管が通されていた。下血によるものか、体内の血液が少し足りなくなっているというので四〇〇ccほど輸血されたらしい。点滴は手首から胸の静脈に移されていた。

紙おむつをしているので生殖器周辺にカビがはえたとか。風通しをよくするのでうちわを持ってきてくれと頼まれる。看護師さんの話では胆嚢の炎症はかなりまだひどいらしい。

平成一〇年五月二八日

主治医から説明を受ける。肝臓瘍が二ヶ所ある。内科での治療は限界なので外科に転科するらしい。

平成一〇年六月二日

外科へ転科

平成一〇年六月六日

胆臓瘍切除及び胆嚢摘出手術。高校総体のため立ち会えず。

平成一〇年六月十一日

食事の許可が出るも本人は口にせず。

平成一〇年六月十五日

拒食から抜け出し、ようやく食事を口にする。

平成一〇年六月十七日

歩いて良いと許可が出ているにもかかわらず、大小便はベッド脇の簡易便器で済ませる。

後日談がある。手術が成功して落ち着いてから母が私に質問した。

「スミオ、周りで看護士さんが山崎さあ〜ん聞こえますかあ！って何回も叫んでたけど私大変だったの？」

「覚えているのか。生きるか死ぬかの瀬戸際だったんだよ」

「ふーん、そう言えば、夢を見たなあ」

「どんな夢？」

「ひろーい湖を泳いでいるの。スイスイって。向こう岸は綺麗な花畑。でも岸に泳ぎ着けなかった」

私は母の話を聞いていて三途の川の話思い出した。渡りきっていたら母は死んでいたのか？ よく聞く話だが死に直面したことがある人は本当にこんな夢を見るんだと思った。

母が生死の境をさまよって入院している期間は丁度高校総体の期間だった。しかもそれは佐世保で開催されていた。その佐世保会場に私は毎日病院から通った。病院で母に付きそう身内は私一人だった。母は頑固者なので嫁を近づけさせない。一人しかない身内である兄は、トラブルで血縁を絶っていた。だから母の入院のことは身内の誰にも知らせていなかった。しかし、「こんな時身内が居れば…」とはまったく思わなかった。私も母のDNAを受け継いでいるから頑固なのだろう。

退院後の母は元気になったが、相変わらずしばしば膀胱炎による発熱を繰り返した。しかしそれは、入院しなければならぬような重症ではなく、主治医のK先生に往診してもらい、クスリを服用すれば症状は軽減した。しかし、生活は手術前と一変し、まったく外出をしなくなった。手術前はバス停まで歩いてバスに乗り、街まで出かけていたが、手術後はバス停までの坂道を歩くのに息切れするようになり、外出するのがおっくうになったのである。だから、私が遠征に行ってる間はずっと部屋の中に居てテレビを見ているだけという生活になった。

そんな暮らしは母も退屈に違いないが、母は頑固だから私が誰かに留守番を頼もうとしてもそれを受け付けない。なので、合宿も遠征もない日曜日の午後にはクルマで外に連れ出し、レストランで昼食させたりして気晴らしをさせるのだが遠くへ行くことはできなかった。膀胱炎を持っているのでトイレが近く、母が遠出するのを嫌がるのだ。

それも、私が母に「レストランに行くときはシャワーを浴びてから行こう」と言った日から外に出るのを嫌がるようになった。なぜ私が母にシャワーを浴びろと言ったかという点、母の身体からはおしっこを漏らした臭いがプンプンするので、その臭いのままレストランに行くと他の客に不愉快な思いをさせると思ったからだ。

母のお漏らしはかなり前からだった。お漏らしした母のパンツも部屋着のワンピースも私が洗濯をしていたが、お漏らしのことについては私も話題にしないし、母もそのことには触れなかった。シャワーのことにについては先ほど述べたが、母はいつの頃からか風呂にも入らずシャワーも浴びなくなっていた。浴槽に入ったり、身体をこすったりする動作もおっくうになったか辛くなったからだろう。レストランに行く前にシャワーを浴びさせようとしたのは、お漏らしが臭うことも理由のひとつではあったが、ずっと身体を洗っていない母に、外出を理由にシャワーを使わせようという意図もあった。八〇歳を過ぎたといえども母は女性だ。そんな母の世話をしながら、息子の私であっても母のプライドや羞恥心を考えると、男手だけではしてあげられることに限度があると思う日々が続いた。

月日が経つうちに、母のお漏らしも、身体を洗わないから汚くなるのもだんだんエスカレートしてきたが、それに加えて鍋でみそ汁か何かを作ろうとして忘れてしまったのか、ガスコンロで鍋を真っ黒に焦がしてし

まったことがあった。認知症が少しずつ進んできたのである。認知症と言えば、食べるものは近くの食堂に電話をかけたら出前をしてくれるので、私が合宿や遠征で居ない時でも大丈夫なのだが、問題は注文したことを忘れてまた注文をすることだった。遠征から帰って来て部屋を掃除し、冷蔵庫を空けてみれば注文した肉が山積みになって、奥の方は腐れかかっているというようなことがしばしば起こるようになった。また、食事を作って冷蔵庫の中に入れ、冷蔵庫の扉に大きな字で「夕食は冷蔵庫の中にあるよ」と書いた張り紙をして出かけるのだが、それでも電話で食堂に注文したりする。張り紙を見た時にすぐ冷蔵庫の扉を開ければいいのだが、見たあとちょっと目を離すともう張り紙のことはアタマから飛んでしまうのだ。

私はこの鍋焦がし事件や張り紙事件を契機に、主治医のK先生と相談をしてヘルパーさんを入れることにした。K先生は田上町の特別養護老人ホーム恵珠苑に依頼してヘルパーさんを派遣してもらうよう手配してくれた。ヘルパーさんに来てもらうようになった翌日、学校から帰ると部屋は掃除されてきれいになっていて、母の夕食はこしらえてあるし、私は本当にヘルパーさんを雇ってよかったと思った。

ところが事はそう簡単にはいかなかった。しばらくすると母がヘルパーさんたちに悪態をつくようになっていたのである。「私は他人の手を借りず何でもできるんだよ。あなたたちのように何もしないでブラブラしているヘルパーなんて要らない。帰りなさい」こう言ってヘルパーさんを追い出そうとするのだ。私はこのことについて母と話し合った。母は自分が冷蔵庫の中で肉を腐らしてしまうとか、扉の張り紙を見ないで食堂に電話するとか、鍋をコンロで焦がすということについては自覚がないし、ヘルパーさんについては怠け者だと思いこんでいる自分をリセットはできない。認知症が進むにつれてその頑固さはますますひどくなっていた。

平成十五年十二月二十九日。東京都体育館で行われたウインターカップから昼過ぎに帰ってきた。私はアパートのドアを空けた途端そこに立ちつくした。モワツと糞尿の臭いが漂ってくるし、玄関を入ってすぐのダインングキッチンには食べもののクズは散乱しているし、よく見るとおしっこだけではなくウンコも床のあちこちにくっついていてる。私は自分の荷物を解くのもそこそこに、母が汚した部屋の掃除や洗濯や糞尿の処理で深夜二時頃までかかった。ウインターカップで三位になり、新聞には鶴鳴のことが大きく取り上げられ、私のインタビューも載った。そんな監督が、帰ったら深夜まで部屋の大掃除をして母の糞尿の処理をしているなんて誰が想像できよう。部屋の片付けをしながらそんな事を思い、ひとり苦笑いしていた。

その現実を母にもはつきり見せ、今度こそ母のわがままは聞かないという断固たる決意で、主治医のK先生とともに母の特別養護老人ホーム入所を薦めた。これまでヘルパーさんをいじめ、他人の手を借りるのを極端に嫌がっていたのに母はこの時ウンと言った。しかし、順番待ちが多く、申請してから入所するまでに四ヶ月かかった。入所したのは平成十六年四月二三日。母は八六歳だった。

私が母を入所させてよかったと思っただけは、母を取り囲む生活環境が変わったことである。アパートに住んでいた時、母が動くものを見るのはテレビの画面しかなかった。でも施設では入所者ではあるが目の前を動いている人が居る。窓からは空を飛んでいる鳥や時々窓際まで来るリスも見える。ヒトは自分以外の生き物の動く姿を見ながら生活しなければ精神まで病むのだ。

食事管理をきちつとしてもらうので超肥満だった母の体重がどんどん減っていったことも良かった。それで何が良くなったかと言うと自分の足で施設内を動けるようになった。これがよかった。そして身体や顔の艶がよくなった。お風呂に入れてもらって散髪も定期的にしてもらうので小綺麗になったのだ。加えて、多くの入所者の中には、自分より若いのに動きが思うようにいかない人がいる。その人たちの世話をするのがまたよい。

多分母は、多くの入所者と比べて自分は年齢よりも若いということを感じて優越感を持っていたと思う。頑固でプライドの高い人だからその優越感が母をまた元気にさせていったのだろうと思う。入所する前の母は、要介護三であったが、一年後には要介護二になり翌年には要介護一になった。しかし相変わらず、膀胱炎からの発熱でしばしば市内の十善会病院に入院した。

四回目の入院は平成二二年五月二四日。やはり膀胱炎からの発熱だったが今回はこれまでと違って少し症状が重い。病院は十善会病院ではなく、泌尿器科・腎臓内科の専門医が居る成人病センターだった。母の入院中は主治医から何回か呼ばれて治療方法と経過を聞いた。医師は深刻にならないように説明をしてくれたが私にはこれまでより深刻な状態だということはわかっていた。

六月に入って私は母の病室のベッドの脇に布団を敷いて泊まり始めた。ベッド脇に下げてある透明な袋に尿管を伝って膀胱から落ちてくる尿の色は茶色のままで入院中まったく色が薄くならない。すでにそれまでに大量の抗生物質が投与されているはずだ。それも効かないのである。しかも、その抗生物質投与の副作用で下痢が続く。今一回がいよいよ最後かなと思いつながら看病を続けた。

六月三日の午後から母の目が一点を見つめたままになった。一点を見つめているが、目のすぐ近くで手を振ればまだまばたきをする。しかし、翌日には手を振ってもまばたきをしなくなった。手を振るのではなく手でまっつけを軽くなでるとまばたきをする。それも夜になるとしなくなった。そして深夜十一時三四分、苦しそうに喘いでいた息が止まった。私は母の目を閉じさせながら、「よかったねえ、やっと楽になれたねえ。おつかれさま」と言った。

満州から引き上げて来て以来、とても苦しい生活を母が支えて私たちを育ててくれたことは前に述べたが、私がまだ小学生の低学年の頃、ある男性が私たちの家に頻繁に尋ねてきていたのを私は覚えていて。そしてその男性が母に再婚話を持ちかけているらしいというのも私は知っていた。母は断り続けていたが、その後年、あれは引き上げ直後に死んだ亭主（私たちの父親）に対しての心情からではなく、「他人の同情なんか受けるもんか、自分一人でこの子たちを育ててみせる」という母の自負心が、そうさせていたのだろうと思うようになった。そのような自負心が晩年嫁を拒み、ヘルパーさんをいじめるような頑固さに現れていたのだろうと思う。

私たちとまったく同じ家族構成でまったく同じ思いをしながら引き上げてきた一家のことを綴った「流れる星は生きている」（藤原てい著）という本がある。作者の藤原ていさんは母と全く同じ年齢だ。後年、娘の咲子さんがお母さんへの思いを綴った「母への詫び状」という本を出した。具体的なことばで表現されていないが、晩年認知症が進んでわがままになったお母さんを咲子さんが慈しんでいる様子が本の中から滲み出てくる。太平洋戦争を挟んで、家族を守り続けて生き抜いた女性はみんな、強くて頑固で偉いのだ。